

本との出会い 人とのふれあい

—子どもたちに伝えたい読書の体験談—

おじいちゃん
おばあちゃんからの
メッセージ



平成19年1月
栃木県総合教育センター

まえがき

近年、子どもを取り巻く読書の環境はかつてないほどに盛り上がりを見せています。県内のほぼすべての小・中学校や多くの高等学校で、朝の読書などの一斉読書活動が行われています。また、小学校では、ボランティアによる読み聞かせが盛んに行われています。乳児期からのブックスタート事業は、ほとんどの市町で導入されました。県も、平成十六年二月に、「子どもの読書活動推進計画」を策定し、県内のすべての子どもたちが、あらゆる機会や場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、家庭、地域、学校を通じた社会全体で取り組むための環境づくりを進めています。

当センターでは、「子どもの読書活動推進計画」における施策の一つとして、平成十六年度に、「本を通じた心のふれあい体験談」を広く県民の方から募集し、冊子を作成しました。今年度はこれに続くものとして、「子どもたちに伝えたい読書の体験談」を、県内の概ね六十歳以上の方から募集し、「おじいちゃん、おばあちゃんからのメッセージ」として冊子を作成しました。

関係機関においては、読書活動推進の一助としてご利用いただければ幸いです。

平成十九年一月

栃木県総合教育センター所長

五味田 謙一

目次

家族の絆きずな

読み聞かせの記憶	1
一冊の本から	1
「本」への想い	3
本は心の目薬	3
父の本	5
本との出会い	5
お母さんが好きな本を	6
読書は耳から	7
孫との語らい	7
家族の優しさ	8
孫に読み聞かせをして	9

心の糧かて

一冊の本から	11
私の読書のはじまり	11
本との出会い	12
一枚の絵から	13
幼い頃から感銘を受けた人と本	14
もうひとつの世界	16
遠い日の祖母と朗読	17
おぼえていないの、でもありがとう	18
読書のよろこび	19
若き日の読書	20
経験こそ宝物	21
絵本との出会い	22
本とのおつきあい	23
本と人との出会い	24
本がつなぐ三世代	25

心のかけはし

- 音読でつながった感動
ああ玉杯に花受けて
本は心
本ってすごい
本は心のかけはし
「夜と霧」とK先生
絆きずなをつよめた文学散歩
読書会と私
読書を通して共感した日
三回の出会い
「虹の会」の活動を通して
楽しい読書会

27 27 28 30 31 32 33 34 35 35 37 37

読書をめぐる思い

- 「かわいそうなぞう」をとおして
新聞を読んで思ったこと
おばさんのひとりごと
　　↳ 絵本を通して「命の大切さ」を伝えたい
かなえられたかぼちゃ作り
方言での読みきかせ
本も宝、子ども宝
お伽とぎ噺「桃太郎」との出会い
児童生徒に演ずることを提唱
読み聞かせを体験して
読書は心の栄養
声のボランティア
「ラジオ深夜便」を手にして

39 39 40 41 42 44 45 46 47 48 49 50

家族の絆きずな

読み聞かせの記憶

小学校の頃は病弱でしたから、学校を休む日がいぶん多くありました。その時、母は枕もとで本を読んでくれました。あの大きな戦争、日中戦争が始まる少し前、今から七十年ほど前のことです。昔は現在のように、本はたくさん出版されていませんでした。

「聖書物語」「アンデルセン童話集」「宮沢賢治童話集」これらを何回、いや何十回も読んでくれました。

キリストが十字架を背負ってゴルゴダの丘を登っていく姿、「よだかの星」「みにくいあひるの子」「雪の女王」布団の中で震え、涙をこぼしました。今でも、あの母の声、物語の中の登場人物、筋、様々な場面を鮮やかに覚えています。

本が好きになったのは、母の読み聞かせのおかげです。

おとなになって、学校に勤めるようになりました。朝会では子どもたちに童話を読んでやりました。入学したばかりの幼い一年生に、日本昔話を聞かせたこともあります。緑の木陰で一時間近く、私語も交わさず、眼を輝かせていたあの幼い姿を今も懐かしく思い出します。

中学校では、卒業間近の三年生には、宮沢賢治の「よだかの星」を読んでやりました。途中で、私は声をつまらせ、泣いてしまうのでした。生徒たちの眼にも私と同じように涙がありました。この人たちの幾人かと、担任ではなかったのに親しい交

わりが今でもあります。

幼少の頃とおとなになってからの本の読み方、受け止め方、当然差はありましよう。しかし、すばらしい本から得られる感動に質の差はないでしょう。その感動が人間の心を美しくし、優しくしてくれるのです。老人である私も、こうして少しづつ、さらに優しくなっていくように思います。

すばらしい作品を何度も何度も読みかえす、すると、その度ごとに新しく感動する。自分では、はつきり気付かなくても、心が豊かになっていくのです。

今私の傍らには、母の読んでくれた、「アンデルセン童話集」「宮沢賢治童話集」文語体の「新旧約聖書」があるのです。

大平町 若菜 貴

一冊の本から

それは、ほんとうに偶然の出会いでした。もう三十年も前のことです。

わたしたち夫婦は、東京に出かけた土産にと、小学生の息子に一冊の本を買いました。二人で選んで、そのタイトルが息子にピッタリだと考えた本は、「六人の探偵たち」という、イギ

リスの作家アーサー・ランサム全集の一冊でした。五百二十ページもある分厚いものです。

わたしは、若い時から絵本が大好きで、子どもが生まれるとすぐに、絵本を与えてきましたし、読み聞かせも続けてきました。いつか、本好きな子になれば良いな、と思っていました。息子が小学生になってからも、読み聞かせを続けていて、時には交代読みをしたり、いろいろ工夫もしました。なのに、彼はテレビ好き、工作好きな子だったせいか、五年生になっても、いっこうに自分で本を読む習慣がつかなかったのです。

ところが、この一冊は、彼をすっかりとりこにしてみました。「ちょっと難しいかな」と思ったのですが、読み出したらもうやめられない、本当に面白い本でした。お土産をもらったその日、彼は夜の十時になっても、十一時になっても読み続けて、わたしたちを心配させました。

そんなに面白いのかと、わたしも、夫も続けて読みたくなり、やはり、先へ先へと読みたくなって、夜中まで読み続けたのでした。その後、このシリーズ十二巻をそろえることになって、家族三人、何度も何度も読み返しました。息子はこの一冊から、読書の楽しさに目覚めたのです。この十二冊の本は、ずっと我が家の宝物になっています。

本の中の人物は、まるで家族の一員のように、わたしたちの日常会話に出てきたものです。そのころ、毎日の食卓の話題は、いつもアーサー・ランサムの本でした。とりわけ、ティティと

いう可愛^{かわい}い女の子が人気者で、ちょうど、飼いはじめたヨークシャテリアの室内犬の名前にしたのでした。このティティとは、十六年間も一緒でした。

本の中の子どもたちがつくる料理も食卓にのせました。コンビーフとジャガイモで作る、ペミカンケーキという子どもたちのキャンプ料理は、息子の好物になりました。卵を茹^ゆですぎた時の「鉄卵」という言い回しがおかしくて、息子も夫も、今でも使うのです。

このシリーズは、妹の家族にも弟の家族にも読みつがれて、結局、それぞれ自分たちの宝物として、購入したようです。

本との出会いは、実に不思議なことだと思えます。読む前は、ただの物でしかなかった本なのに、ひとたびその中に入り込めば、中の人物たちが話し、笑い、動きまわって、別の世界に連れていってくれるのです。

ひとたび読書の楽しさを知れば、もう世界は無限大に広がっていく…。それを知った五年生の息子の読書量はどんどん増えたりしました。「英語を勉強して、原書で読めるようになりたい。」とよく言っていましたし、「いつか、本の舞台となったイギリスの湖沼地帯に行ってみよう。」と家族で言い合ったものです。みんなの夢になりました。

わたしは、久しぶりに、「六人の探偵たち」を開いてパラパラとめくっているうちに、いつの間にか読みはじめ、とうとう

深夜の二時まで読み続けてしまいました。息子に電話してみましたくなりました。

上河内町 原田 とき子

「本」への想い

「本」というといつも思い出すのは、子どもの頃のことです。

五人兄弟（幼い頃弟が一人欠けて）の我が家では生活も楽とはいえず、なかなか本を買ってほしいとは言いがたかった。私にも読めたものは大人向きの「世界名作全集」だけでしたから、読めない漢字を父に尋ねながら読んでいたものです。

その頃の一番の楽しみは、クリスマス兼お正月のプレゼントでした。十二月二十五日の朝目覚めると、必ず子どもたちの枕元にそれぞれ一冊ずつ本が置いてあったからです。一番年上の私は、真夜中にそとと障子が開き、父と母が足音を忍ばせて入ってきて、子どもたちの枕元に本を置いていくのを知っていました。それがいつまで続いていったのかはつきりとした記憶はありませんが、子どもたちがある程度の年齢になるまで続けられていたのは確かです。

両親がどんな思いで、子どもたち一人ひとりにその本を選んでもくれたのかは分かりません。また、何という題名の本だったかも覚えていません。でも、兄弟それぞれが「自分の本」を見つけて、それを抱きしめていた嬉しそうな光景はつきり覚えています。

今の私は、離れている孫のために、クリスマスプレゼントに本を送っています。

足利市 女性

本は心の目薬

あれは、私が小学校五年生の時でした。「学芸会」があったのです。王子様とお姫様がラクダに乗って月の砂漠を旅する踊りです。チビの私はお姫様、スマートな彼女は王子様、学芸会、踊りの花形です。したくは、白いブラウスに、白いスカート、母は白い腰巻きをスカートに縫いなおしてくれました。

ああ、それなのに、踊りを憶えられない私は、おろされてしまったのです。スカートはまた、白い腰巻きに変身したようでした。

下手でおろされた私にも、ちょっぴり同情が集まったらしく、

学芸会に、本の朗読で出場、「ドングリと山猫」の一部分を。

学芸会の当日、母が見えて、帰ってから、「よく読めたね。」とほめてくれました。

なにしろ「出頭すべし」を「であたますべし」なんて読んでいたのですから。誰にもほめられなかったのに、母はほめてくれたのです。

それからというもの、職員室の廊下の脇にあった学校の本を、かたっぱしから借りては母に聞かせました。父は病気で母子家庭、母は、昼間は助産婦、夜は針仕事（着物縫い）。学校の本は、家では買えない子ども向け世界文学全集でした。「フランダーズの犬」は、泣きながら読みました。母も泣いていました。「小公子」「小公女」等は、まるで自分が主人公になっていました。

普通は、親が子どもに読んで聞かせ、本の好きな情緒豊かな子になったなどと聞きますが、逆でした。でも母子のふれあいがあったのです。

「フランダーズの犬」「長靴をはいた猫」本の影響で、犬も猫も飼いたかったけれど、貧しくて飼えなかった長い年月でした。今、ひろった犬は、靴をかくし、夫を吠え、フランダーズの犬にはほど遠い存在。ひろった猫は、長靴もはかず、裸足で庭からカマキリをくわえて、畳の上で大興奮。本の内容とは似ても似つかないけれど、我が家の家族です。

教師になって、図書室の本を親に読んで聞かせる宿題を出し

たこともありました。

今、民話の語りべとして、心楽しくすごしています。「本は、今も昔も心の目薬だべ。」「目薬はな、顔を上にむけてな、目に入れるとすつきりシャンシャン、するんだわ。」

五木寛之って小説家も言ってた!! 体をつくるには、食物の栄養が必要。心をつくるには本からの栄養が必要だって。今は、学校の図書室にも、どんぶらと本があって、町の図書館にもどつきりあってさ、いつでも借りられんだよな。

このあいだ三歳の子がよ、「これー。」なんて図書カード出して、絵本かりてた。おったまげたよ、わっしも「これー。」なんてカード出したら、カード返された。よく見たらデパートのカードだったよ。

「なに、借りたかって? 『あらしの夜に』 ハラハラドキドキしちゃうから、ごちそうなのにともちで、なかよしなのにおいしそう。」「オオカミとヤギの絵物語六巻シリーズ。ぜったいぜったい読んでみて。感動するよ。家の人にも読んであげて!! 泣くかも?…」

本だいすき。おばあちゃんのおすすめ。



真岡市 柳 徳子

父の本

小学校一年生のころであつたらうか。ひとねむりして目覚めた私は、隣室のうすあかりに気づいて起きあがり、襖ふすまをあけた。

そこには電灯を低くして何かを読んでいる父がいた。暗くこごまる父のうしろ姿。母も兄弟たちも寝静まった真夜中の机に一人向かつている父。そのうしろ姿が今も私の脳裏にあつて亡き父への敬慕がつのる。

「読書」などということばを聞くことのなかつた昭和初期。農家のやりくりに多忙な父の深夜のうしろ姿。本屋も書店もない農村で父が読んでいた本。それは、当時の烏山学館（現・烏山高等学校）で学んだ、いわば教科書。黒い表紙、和とじの三冊である。論語、日本外史、史記であつたことが長じてわかつた。それらは常に父の机上にあつて明治の父の宝物のようであつた。漢字だけのそのむずかしい本を子どもたちも貴重な本として、その本のあること、それを読む父のいることが誇りであつた。そして、…本はひとり静かに読むもの…ということも父の無言の教えであつたように思うこのころである。

読書する親の姿、子どもにとって貴重な姿である。

那珂川町 塚原 タイ

本との出会い

今から六十年以上前のこと、私が四、五歳の頃だつたと思います。我が家にはたくさん本の本に混じつて、グリム童話集が本棚に入っていました。

はじめてこの本を手にとつたのは、漢字ばかりで書かれています。むずかしい本の中に、カタカナで「グリム」という文字があり、これが私でも読めた一冊だつたからです。何が書いてあるのか興味半分、本棚から引き出して中を開いて見ると、ひらがなと漢字で書かれていたので私には、よく読めそうにありませんでした。

その頃、家には学校の教員になつた叔母が時々泊まりにきていました。私はその叔母と話をするのが大好きで、お風呂にも一緒に入つて昔話を聞かせてもらつたり、また講談社の絵本を読んでもらつたりしていました。あの当時よくあきずに同じ本を読みました。

ある時、叔母にグリム童話を読ませて、夜遅くまで聴いていました。

幼児時代は、両親が共働きだったので、昼間は祖父母と一緒に過ごすことがほとんどで、祖父のひざに抱えられ、祖父が購読していた「キング」の中に掲載されていた漫画を、せがんで読んでもらっていました。

今考えると、その頃にたくさん読んでもらつた童話の中に出

てくる「灰かぶり」「ヘンゼルとグレーテル」「命の水」や、絵本の中の「したきりすずめ」「うらしまたろう」「花咲かじじい」「かぐやひめ」等々のお話から、自然と、正直、親切心、正義感、善悪の判断、家族愛等が育まれてきたように思います。

高校時代は、汽車で片道五十分かけての通学でした。当時汽車の中では、いろいろな本を図書館から借りて友たちと読みあさりしました。当時はテレビのない時代でしたから、新聞や読書は大切な情報源でした。友たちが読んだ本の中からよかつたものを次に借りて読んでみました。

そして本の内容について話し合ったりしていました。自分の考えと同じだったり違っていたり、どうして自分とちがうのか考えたりして、大変勉強になったように思います。同じ本を読んでも、人それぞれ受けとめ方がちがってくるということ、他の人みんなが自分と同じではないことがわかったようでした。

足利市 女性



お母さんが好きな本を

絵本が好きだった私は、子どもたちと一緒にたくさん絵本を読みました。母親になりたての頃に「お母さんが気持ち良いと、赤ちゃんも気持ちが良い。」「絵本で何かを学ばせようなどと思わず、お母さんが好きな本と一緒に楽しんで。」というコトバに出会いました。それはずっと私の子育ての「根っこ」となり、好きな本を好きな時に思いっきり楽しみながら読んできました。

子どもも大きくなり、寝る前の読みきかせをしなくなつてからもうずいぶんになります。今でも時々絵本を見てみると、いつの間にか皆が集まり「ここが良いよね」「あれ？こんな話だった？」と話がはずみ、小さい頃とは違つた楽しさもあります。

また最近では、子どもが気に入つた物語を紹介してもらい、私も読み、内容について語り合えるようになり、いつの間になんかに大きくなつたんだろうと、嬉しい驚きを感じるようになりました。いくつになつても本を通して親子でつながつていられるんだなあと実感し、これからも、形を変えながらたくさん本に出逢い、夢の世界を広げていきたいです。いつか孫たちと一緒に絵本を囲む日を楽しみに。

足利市 女性

読書は耳から

今から五十年以上も前になるが、私が住んでいた所は、田や畑に囲まれた農村地帯であった。農繁期になると、就学前の子どもたちを公民館に集め託児所が開かれた。私の母はそこで子どもの世話をする仕事をしていた。小学校低学年であった私は、学校から帰ると毎日母の所へ遊びにいった。そこで、母はよく子どもたちに紙芝居を読んで聞かせていた。私は後ろの方で隠れるように見ていたが、今でも紙芝居の絵と、母の読み聞かせている声が、はつきりと耳に残っている。母の声は、いきいきとして、物語に思わず引き込まれてしまうほど素晴らしく、いつも驚きであった。

その後、五・六年生になって、担任の先生が暇をみてはよく本を読んでくれた。トルストイの「イワンのばか」などとても面白かったが、なによりもその声から読書の面白さを伝えようとしていた先生の気持ちが一番に感じ取っていた。

現在、若い母親たちと一緒に小学校で読み聞かせボランティアをしている。彼女たちが我が子の前で読み聞かせをしている様子を聞くと、微笑ましく素晴らしいと思う。子どもにとつてきつと、母親の姿や声は特別なものとして、一生忘れないであろう。

私は、詩や絵本が大好きである。絵はもちろん好きだが、短い言葉で語られている文章には、たくさんの意味が隠されている。

る。声を出して何回も読んでみると、行間に込められた作者の思いがいろいろと想像でき、広がっていく。

私の読書の原点は、母の紙芝居を読んでいた姿と声である。読書は耳から入ってきた言葉であり、声の響きである。その声の響きに魅せられて、一人でもできる朗読を楽しんでいる。

岩舟町 女性

孫との語らい

娘の家に久しぶりに手伝いにいった。孫は中学生最後の夏休みに入り、県大会を目指す部活の特訓。そして来春の高校入試の対策とスケジュールぎっしりの毎日である。

「おばあちゃん、今年の夏は『坊ちゃん』と『西の魔女が死んだ』を読む予定だよ。」

「おばあちゃんは、『西の魔女が死んだ』という本は知らないなあー。」

「読んだら教えてあげるネ。」理系が得意という孫娘との会話である。

余計な話などできないほどの忙しいさ中に、五十歳以上も年のはなれた孫とのこんな短い会話に、私はジーンとくるものを

感じた。

何年か前に留守番にいった時には、手持ち無沙汰ぶさたにしている私に「おばあちゃんこの本おもしろいよ。」と言って「賢者の石」「グッドラック」を手渡してくれた。お互いに本で感じたことをゆったりと話し合って、孫の成長と心の軟らかさを感じたものだった。

孫とは余裕を持って接することができるが、子育ての頃はどうだったのだろう。子どもを寝かせるのによく本を読んであげたことは覚えているが、何を読んであげたかさっぱり思い出せない。「お母さんそこは違うよ。」「また間違えたよ。」と、何度も子どもに脇腹をつつかれたことしか思い出せない。子どもに本を読んであげるつもりが、日中の疲れで眠気におそわれ、朦朧もろもろとなってしまふのである。そんなことを娘は覚えているのだろうか？それとなく聞いてみた。

「うん。中でもあの本が好きだったので思わず子どもに買ってあげたよ。」と言う。

そうそうそんな本があったっけ。今でもボロボロになって本棚の片隅にある。何処どこで買ったのだろうか？…。あの頃の私は、本屋さんのぞくゆとりさえなかった。あの本はきつと練馬の兄嫁の手土産でいただいた物だったように思う。

本好きな子どもになって欲しいと願いつつ、強い眠気と戦いながら一生懸命に子どもに本を読んであげたことが、孫とのさやかな会話につながったように思う。昔の苦勞に、今褒美を

いただいた思いである。

時間が確かに自分のものになった今、孫とはもちろんのこと年代を超えた本好きの人たちと何歳になっても語り合つことができるように、これからも読書を続けてゆきたいものと思う。

佐野市 女性

家族の優しさ

どうしようもない悲しみに、さいなまれた時、読書によって救われたのでした。振り返って見れば、二十三年前のこと、自覚症状がなく、健康診断のつもりで病院へ行つたところ、医師は検査の結果を見て、すぐに入院、手術と言つたので、びっくりしたのは、当の本人、私でした。その時、涙がとめどなく流れ、たとえようのない不安な気持ちでいっぱいでした。自然に「惜命」、私のこの命がいとおしく思われました。

主人と息子は、生活が一変してしまいましたが、不便なことは一言もいみませんでした。ただ病院へ来る毎に、何冊かの本を持ってきてくれました。病気に関する本、心が慰められる本、料理の本、等々でした。

私は、ただ病気が治り、普通の生活ができることを祈るばかり

りでした。そして、一命を取りとめ、無事に退院できたときは、とても嬉しかったです。現代の医学と医師の方々、看護師とスタッフの皆様に感謝するばかりでした。

退院した後、今度は、通院しながら、投薬、検査、リハビリ、の繰り返しが続く、あたかも病気の戦いでした。その時、主人と息子は「退院おめでとつ、よかつたね。」と言ったものの、気の利いた励ましの言葉もなく、男ゆえにこまごまと手伝ってくれるわけもなく、ただ読書を勧めるだけでした。

書物からの知識がいかに多かつたか、今になって、つくづく思います。本との出会いは著者との出会いであり、人とのつながりでした。知らず知らずに思いやりの心が芽生え、心の寂しさを満たしてくれるものになっていました。また、書物から、「過労死」ということを知り、十年以上勤めていた幼稚園を辞めました。その後労働条件が変わり、土・日曜日が休日となったので、どれ程うらやましく思ったことか知れませんが。

今でも、主人からのプレゼントは本です。息子は就職して、遠く離れています。帰省する時の土産は「お母さん、この本、読んだ？」と言って、何冊かの本です。家族のやさしさは、さうとした関係で、とても心地よく感じています。

その後、図書館で「絵本の読み聞かせ」をやらせていただいています。子どもたちとのふれあいはとても楽しく、人生の宝物です。絵本を通して共感したり、時間を共有したりすることで、生きる喜びを感じています。

上三川町 小林 シゲ

孫に読み聞かせをして

私の娘は子宝に恵まれ、二男一女を授かった。私にとって三人の孫は、生きる支えともなっている。

孫たちには、豊かな心を持ち元気にたくましく成長して欲しいと願い、絵本の読み聞かせをしてきた。孫を膝の上に抱き、食べ物の絵本や「いないいないバー」の絵本を見せては「おいちいおいちい。」「いないいないバー。」と何度も読んで遊んだ。

二人の男の子は、成長に伴い動物や虫、乗り物の絵本が大好きになった。動物や虫の絵本は「可愛い可愛い。」と一緒に手で撫でながら読んだ。戸外に出ると虫や蛙を追い駆け、捕まえては手の上に乗せて遊び「有難う。また遊んでね。」と言って草むらに逃がしてやった。

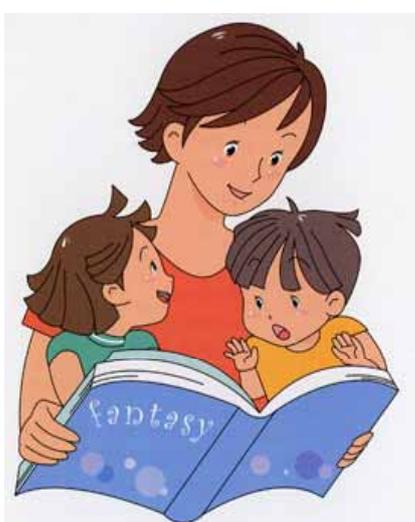
ある日、孫たちを連れて公園に行った。二人の男の子は、虫を追い駆けて遊び始めた。四歳の子は、バッタを捕まえて大喜び。逃げようとするとバッタ、逃がすまいとする孫。そうこうしているうちにバッタは、孫の手に片脚を残して逃げてしまった。その脚を見て驚いた孫は、駆けてきたかと思うと私の胸に飛び込んで顔を埋めた。悪いことをしてしまったと思ったのだらう。私は、黙って頭や背中を撫でた。そばで見えていた娘が「これからは気を付けようね。」とやさしく言うと、孫はほっとしたのか、また虫を追い駆けて遊び始めた。

二人の男の子は小学生となり、我が家にお泊まりするのが大好きで、寝る時は絵本をそれぞれ三冊も四冊も抱えてくる。「一冊ずつね。」とは言つもの、三、四冊は読むことになる。読み終わるとお話を催促されるので昔話等をする。私が疲れている時は、適当に話を省略すると、「そこは違うよ。一っつだよ。」と言つて孫が話を続ける。私は、ウトウトしながら話を聞いている。最後に子守歌を歌う。「ねんねんころりよ。」と歌っているうちに静かな寝息が聞こえてくる。やんちゃ盛りの二人の男の子も絵本を聞いている時は、何とも素直な良いお顔となっている。私にとっては、至福の一時となる。

今では、小学校で朝の読み聞かせのボランティアをしている。子どもたちは、楽しみに待っているとのことで、私にとっては人生の宝となっている。

私は絵本の不思議な魅力に引かれ、読み聞かせの奥の深さを知り、経験を積んでさらに学んでいきたいと思っている。

鹿沼市 女性



心

の

糧^か_て

一冊の本から

家の本棚に眠っていた「矢板の伝説」という本を何気なく開いて読んでみると、予想しなかった面白さに驚きました。

矢板という土地に居なければ分からない、自然の良さと厳しさ、その厳しさに苦しむ人間の無力さ、そしてその厳しさに立ち向かう強さと努力する人たち。また、社会の仕組みの中で喘ぐ人たちの悲しみ、その悲しみをはねのけようとする行為の機智に富んだ面白さから、この土地の人たちの思いが時を経た今でも私の胸に伝わってきます。

風土が作り出す自然への取り組みや、社会組織が作り出す人間関係がその土地の人柄を作り出すのだと思うと、知ることが楽しくなってきました。矢板に住んでいながら知らなかった伝説がたくさんあって、ワクワクしながら読みました。

そして、こんなに良い本を皆に読んで欲しい、特に子どもたちには読んで欲しいと思いました。自分たちの住んでいる街のことが分かれば、自分たちの街をもっと愛する心が育つのではないでしょうか。

同じ頃、図書館が主催する民話の講習会がありましたので、すぐに受講することにしました。自分たちの街に伝わる話を多くの人に知って欲しいと思ったからです。

この講習を受けたことで、さらに多くの民話や伝説と出会いました。栃木県を始め日本国内や外国の話を読む楽しさ、それ

はその土地のことを知ることであります。

何よりも、方言や郷土の歴史を調べたり、話し合ったり、時には現地へ行って話を聞いたりする仲間のできたことの喜びをしみじみと感じました。

こうした喜びもあの一冊の本から始まったのだと思うと、老眼鏡をかけて読んだ甲斐があったというものです。語りを通して話しの面白さを知ると同時に、郷土の良さを見直して、こうした民話や伝説にも親しんで欲しいと思います。

矢板市 女性



私の読書のはじまり

「読書」という言葉の意味が本当にわかりだしたのは、小学校（当時は国民学校）三、四年生だろうか。二年生になったばかりのある日、担任の先生が休まれ、代わりに男の先生が来られた。背の高い野澤先生だった。

「今日はぼくが代わりにやります。」と言われたかと思うと、

何冊かの本を教卓に置かれた。私たちはいつもと違う国語の時間に戸惑ったことを覚えている。担任の齋藤先生は綴り方を楽しく教えてくださったが、その一年間はあまりお話しは聞かせてもらえなかった。

野澤先生は「これから僕の好きな本を読みます。」と言われて、大きな、しかし、やさしい声で、「くもの糸」を読み始められた。ざわついていた教室もいつの間にか静かになったことを覚えている。二年生の私にとっては、あまりにも感動が強すぎて、もう何十年も前のことなのに、その時の先生と本の内容とが鮮明に浮かび上がってくる。次は「杜子春」を読んでくださった。今にして思えば、あの野澤先生は、芥川龍之介が好きだったのだ。

今、私は標準語(共通語)で朗読ボランティアをしているが、あ那时的先生は、少しもナマリなどなかった? ような気がする。それとも三河弁も入っていたのだろうか。野澤先生は上方のえらい? 先生だったのだろうか? その辺のところは定かでないが、私が少々長い文章を読書というかたちで読み出したのは、三年生になってからである。先生の読まれた物語の中に「みにくいあひるの子」も入っている。なつかしい私の小学校の頃の思い出である。

家では、父のおみやげが、講談社の絵本。四人兄弟の長女の私は、いつも読み役。内容もさることながら、挿絵が素晴らしく、何故か高畠華宵の名前が第一に浮かんでくるのだが。絵

本は、「くもの糸」「杜子春」などから比べるとかなり子どもっぽいものであったが、私たち四人にとっては宝物だったのだ。おみやげは本以外のものもあつたかもしれないが、どうしても思い出せない。名古屋の病院勤務の父は、いつも家にいるというわけでもなかったが、四人の子どもによく自作のお話しを聞かせてくれた。本当は医者になどなりたくなかつたと晩年になつて言っていた。内科・小児科医の本好きの父ではあつた。私の読書の原点はこんなところだろうか。

真岡市 中野 直子

本との出会い

私には、忘れられない一冊の本との出会いがある。それは、私が中学校に入學して間もない頃であつたから、今から四十年以上も前になるであろうか。

母に連れられ、近くに住む母の友人宅に行つた時のことである。部屋には、整然と並んだ本棚がいくつもあり、この友人はかなりの読書家らしいことが私にも理解できた。長話を予想してか、その友人が一冊の分厚い本を私に差し出してくれた。当時、あまり本に興味を持っていなかったのと、大人たちの世間

話の方が楽しそうであったので、私は、その分厚い本を膝の上でパラパラとページをめくって遊んでいた。

何度も何度も、パラパラとめくっているうちに、トロッコの挿絵と「雪くる前の高原の話」が、目に止まった。それには、山から掘り出された石炭が、町の工場に運ばれていく様子が書かれていた。見知らぬ町への期待と不安を語りあう石炭、トロッコの悩みや苦しみの言葉が書かれた童話であった。

私は、いつの間にか本の世界に入ってしまった、母に帰宅を促されるほど夢中で読んでいた。残りの頁は、その本を貸していただき、家に戻って最後まで一気に読んだことを覚えている。その本は、「小川未明」の文学全集であった。これをきつかけに本の楽しさ・すばらしさを知り、さまざまな種類の本を読みふけた。こうした読書経験が、後になって私の子育てに役立つことになった。

娘が小学四年生の時、夏休みの宿題に読書感想文が出された。何を読んだらいいのか困っている娘に、未明の作品を薦めたことがあった。最初はとまどいながらも、私と同じように未明の分厚い本に夢中になり読んでいた。その娘も、今では一児の母になり、まだ一歳ではあるがその子に読み聞かせを始めている。やがて、この子ども童話の世界に喜々とするのだろうか、とても楽しみである。

時折、母と共に訪れる友人宅。九十七歳になった現在でも、毎日、本を読むことを欠かさないという。年老いた二人のお茶

飲み話に耳を傾けながら、私は、読書という生涯の楽しみを得た遠い日の時の流れを感じ、感謝している。

那須塩原市 小野崎 敏子

一枚の絵から

今年私は古稀（七十歳）を迎えた。立ち止まって、今こうあるのはどうしてなのだろうか、来し方行く末を思うことがある。

私の育った頃は太平洋戦争が始まり、終戦を迎えたという時代であったから、生活は貧しく、特に戦後は食糧にもこと欠く程であった。そのような中でも世の中がだんだん落ち着き、本等も買えるようになると、母は私に毎月一冊の雑誌を買ってくれるようになった。「少女クラブ」である。連載小説に、ヨハンナ・スピリの「ハイジ」があり、落谷虹児の特徴あるさし絵があった。そして三つ折りにして西洋の絵がとじ込められていた。その中に印象的な一枚があった。ルノアールの「ピアノに寄る娘」の絵である。明るい色彩、ピアノ、カーテン、レースの服……これらへのはかないあこがれから、絵に関心をもつようになっただけでいい。さまざまな絵を見るうちに、それを系統的

に知りたいと思うようになった。

名画といわれる一枚に出会うと、驚きをおぼえ感動し、それらが作られた時代がどんな時代であったか、作った人がどんな気持ちで作ったかと、さまざま好奇心を引きおこしてくれる。そこで私は作者に関する評伝、書簡集、作者の生きた時代を書いた小説などを、見つけて読んだりする。読書を通して絵を再認識し、その中から歴史はくり返されることや、どのような時代環境にあっても多くの人々は精一杯生き、その礎の上に今の私たちがいることを実感し、人間の素晴らしさを知るのである。

幼い頃に得た好奇心が今頃まで続いているのを、自分でも不思議に思う。最近では細かい字を読むのも多少は億劫にもなってきた。けれども、絵を見、本を読み、講座を通じて知り会えた友人たちとの交流を楽しみながら、非日常の空想の世界へ心を遊ばせたいと思っている。

日光市 女性

幼い頃から感銘を受けた人と本

私が生まれ育った村は、現在では市町村合併で足利市になりましたが、大正昭和の初期には一寒村に過ぎず、山裾すその小さな

小学校には絵本すらありませんでした。

私の祖母は慶応生れ、士族の家に生れ育てられたためか、読み、書き、そろばんに長け、躰しっけは大変厳しく立居振る舞いにも注意をされ、恐い存在でした。でも私が小さい頃は、祖母の部屋の菓子と昔話につられ、あまえておりました。「花咲じじい」「桃太郎」「こぶ取り物語」等々、行いの正しい良い人、欲深い自分本意の悪人と、善悪を判然と分らせる昔話が多く語られておりました。

たしか一年生の頃、初めて町の土産に買ってもらった絵本は、紙質が悪く原色で書かれた粗悪なものであったような記憶があります。それでも学校に持っていくと皆取り合って読みまわしをしておりました。

小学校も高学年になりますと、町の本屋が注文を取りに来るようになり、単行本で「レミゼラブル」「夾竹桃きょうちくとうの花咲けば」「ああ玉杯に花受けて」といった長編小説を夢中で読みあさりました。五年生の受け持ちの先生が、毎日昼食のあと本の読み聞かせをして下さいましたが、毎日の時間が待たれ、話に引き込まれていきました。

強烈に頭に残っている話は「山椒大夫さんしょうだゆう」でした。人買いにだまされた母姉弟が、別々の舟に乗せられ離ればなれになり、過酷な運命にもてあそばれながらも、互いにかばい合い、いたわり合って生きぬいていく姉弟愛に、毎日涙を流しながら聞き入ったものでした。最後に立派な国司となり佐渡に赴任され盲

目となった母親が、雀^{すずめ}追いをしながら歌う「安寿^{あんじゆ}恋しやホーヤホイ。厨子^{ずし}王恋^{おう}しやホーヤホイ。」の歌声に気づき再会できた時には皆我が事のように喜んだことが思い出されます

小学校五年六年を担任して下さった先生の教育指導が実に立派だったこと、多感な少女期を過ごせたことが何物にも代え難く有難いことでした。

終戦直後の結婚、子育てに奔走真最中、昭和二十二年キャサリン台風で渡良瀬川は大氾濫、足利市は水害で大打撃を受けました。暗に漏れず我が家も床上浸水の被害を受けました。その時贈られたララ物資（敵国として憎み罵^{ののし}っていたアメリカのボランティア団体からの見舞品）を複雑な気持ちで荷物をとくと、子ども服にまじって一冊の絵本を見つけました。終戦直後の食糧不足のみに追われていた荒^{すさ}んだ心に良風を吹き込む、温かくすがすがしい色彩の「アンデルセン物語」でした。「マツチ売りの少女」「醜^{みにく}いあひるの子」「裸の王様」等々。美しい夢のある色調の絵本は、どの頁^{ページ}を開いても感動するばかりでした。

「マツチ売りの少女」は、金持ちの家庭の華やかなクリスマススの飾り付けとご馳走^{ちそう}の団欒^{だんらん}を窓越しに見ながら、最後のマツチの一本に火を付け、そのわずかな炎に手をかざし、暖をとり静かに天に召されていきませんでした。少女の話は、子どもたちに幾度話しても泣けてたまりませんでした。「醜^{みにく}いあひるの子」自分に自信と誇りをもって生きる大切さ。やがて花開くというこ

とを教えているように思われました。権力におもねて、家来は王様のいうがままに従っているのに、子どもは純真に見えたまに王様の裸を笑いました。「裸の王様」は現代の大人の世界にありがちな物語と、深く考えさせられるものがあります。

現在では好きな時に好きな本が求められます。本を読んだ時、作者の言わんとしていることを考え熟読した時に、感動も一層深まるものです。「今の日本に一番欠けているのは人間らしい感情だと思う。豊かな情感、感情を取り戻すべきだ。」とある作家が言われました。一朝一夕で直るものではありません。お母さん方、先生方の小さい時からの良い本の読み聞かせ、家庭教育の充実によって、感性あふれる喜怒哀楽の豊かな子どもらしい子どもであってほしい、これが、昭和・平成の子育て体験をしてきた者の願いです。



足利市 栗原 きよ

もうひとつの世界

一冊の本がひらく

もうひとつの世界

物語がひらく

もうひとつのこころの世界

そこで出会う

もうひとりの自分に

会いにでかけよう

一冊の本がひらく

もうひとつの心の世界

物語が照らす

あこがれや不安

やがてもうひとりのわたしが

動き出す

そしてほんとうのところが

何に惹かれ 何を信じ

何を求め 何を本当に愛するかを

感じ始める

それはきつとわたしを

「よろこび」でいっぱいにする

思いきって出かけよう

一ふりの勇気をはいて

もうひとりの自分に

会いに出かけよう

一冊の本がひらく

もうひとつのこころの内側

物語が映す

かくされた恐れや欲望

やがてもうひとりのわたしが

立ち上がる

そしてほんとうのところが

何を憎み 何を悲しみ

何を拒み 何が本当に大切かを

語り始める

それはきつとわたしを

「強い力」でいっぱいにする

ひとり出かけよう

一ひらの希望をまとい

もうひとりの自分に

会いに出かけよう

遠い日の祖母と朗読

一冊の本がひらく
わたしのこころの現実
物語が押し開く
わたしのこころの門かんぬき
やがてもうひとりのわたしが
歩き出す
そしてほんとうのこころが
しまい込んだ苦しみを自由に
なくした哀しみを歌いだす
それはきつとわたしを
「愛しさ」でいっぱいにする

そつと出かけよう
一かけらの夢をだいて
まだ見ぬわたしに
会いにでかけよう



真岡市 稲葉 治子

ぬけるような青い空、白い雲、夏はまっさかりと思えるのに、子どもたちの夏休みは、もう終わり。みんな宿題完了したのかしら、「読書感想文が一番苦手。」と言っていたあの子は、書けたかしら、「本を読むのがおそくて駄目なの。」と言っていたあの女の子は、何冊読めたのでしょうか？…等、しきりに気にしている私は、学校の朝の読みかせ、訪問朗読をして十年となりました。

この夏十年の節目として、会員全員で「親と子のための読みかせ」をテーマに、発表会を催しました。指導の役を引き受けた私は、各人の声の質にも合わせ、それぞれの人柄にもふさわしくと、懸命になったつもりでしたが、残念ながら会場は、空席が多かったのです。指導力の不足か、指導者としての知名度の低さか、それとも根本的に朗読そのものへの関心が地域にないのか、私は大変落ち込みました。

でも、常日頃学校の現場にいつている自分にとって、手応えは確かにあるのです。子どもたちは、学年毎にいい反応を示してくれるのです。聞く姿勢も良くなってきました。挨拶あいさつもきちんとするようになりました。教室に入っていくと、今日は何を読んでもくれるのかなと、キラキラした目を向けてくれます。読みかせの本の中から、子どもたちは確実に何かを心に育てていると信じなければ、朗読は続けていけないと思います。発表

会で落ち込んだとはいいながら、後期の学校が始まれば、私はやはり子どもたちの前に本を持って立っているでしょう。

ここまで朗読の世界に魅せられている私の原点は、遠い日の祖母の言葉です。私は小学校三年生か四年生だったと思います。予習で読んでいたのか復習で読んでいたのか覚えてはいません。そして、題名も記憶にありません。ただ、国語の教科書の中の詩の一行で、「かんとさえた冬空」という表現のある柚子をうたった詩であったことだけは、はっきり残っています。

当時、七十歳くらいではなかったかと思う祖母が、それを聞いて「もう一度。」「もう一度。」と言ってくれたのです。そして、その夜から、毎夜、祖母の寢床の傍らで、国語の教科書を読む私になりました。あまり多くの会話はなかったと思います。ただ、「ありがとう。もういいよ。」と言いながら眠りにつく祖母の頬に、何度か涙がこぼれているのを見ました。私には、何の涙か思い計ることはできませんでしたが、その頃から私は、大変な読書家になりました。

読書の世界の中で私はいくつもの夢を育てていました。子どもなりに何人もの役を演じていました。ただ戦時中のことで、たくさん制約のある少女時代でしたが、我が家の蔵には、たくさん蔵書がありました。その頃から、いつか人に本を読んでも聞かせたいと思う気持ちは、育まれてきたと思います。

今の書籍の全部が、上等な紙質、明確な印刷、美しい挿絵、手にしただけでどれもこれも読みたくなってしまふ図書の多

さ。こんなに溢れて恵まれすぎると、本は憧れるものではなくなってしまふのでしょうか。

お母さんたち、どうぞ子どものために、お祖母さんたち、どうぞ孫のために、たくさん本を読んで上げて下さい。

そして、子どもたちの、孫たちの読む本を、聞いてあげてください。読書を通じて育てましょう。命の大切さ！人の心の優しさ！

遠い日の思い出の祖母よりもいくつか年を越えた私ですが、祖母が聞いてくれた私の朗読を、私は声の出る限り続けていきたいと思えます。

大田原市 竹内 倫恵

おぼえていないの、でもありがとう

本を読んでいる時は私にとって至福の時間だった。だった？そう、だったのです。

サルトル、カミュ、カフカ、生意気盛りでした。モームやモリス・ルブランには夜が明けるのも気がつかないほど熱中しました。

中堪助、高橋和巳、倉橋由美子にも夢中になりました。読書

会、作家を囲む会などもいきました。たくさんの人のお話も聞きました。「深く読まれていきますね。」と宮尾登美子先生のお褒めの言葉を頂戴したこともありました。趣味は読書でした。今現在、私はみんなの前で本を読んでいます。読み聞かせで輝いているのです。

十か月の赤ちゃん、お母さんの膝に抱かれ、私が絵本を読むのを聞いています。時々、「くつくつ」と声をあげて笑うのです。この十か月健診での読み聞かせは絵本の素晴らしさを改めて再認識、感動させられております。

子育て支援、保育園、学校。たくさんの所に読み聞かせに行っています。たくさんの本や詩を読みました。読み手と聞き手の一体感、それは宇宙なのです。それは想像と創造が奏でるシンフォニー。少々オーバーですが。そうなのです。

私は現代の児童文学・絵本に対し無知でした。地域文庫を手伝って欲しいと言われた時、三十三歳の私は「ええ〜！」という感じでした。知らなかったもので。これが子どもの本との出会いです。例の如く、かたっぱしから読みました。絵本を見ました。そして、好きになりました。敬愛する先輩の「貴女がやるのよ。」のあの鶴の一声に今となっては幾度感謝したことやら。本は個人的なものではなくなったのです。

しかし、避けて通れないものが私の行く手をさえぎるのです。加齢とともに全てが衰えはじめました。特に目。大好きな絵本、読み聞かせがやりづらくなってきました。捨てる神あれば拾う

神ありと、今度は民話語りに出会いました。公演(?)の場が大人、お年寄りまで広がったのです。

私は宮城県、それもほとんど岩手県に近い若柳町という田舎町で生まれました。戦争の終わつたすぐ後でした。祖母は私が三歳の時に亡くなったそうです。覚えていないのです。「おばんちゃん」と呼ばれていました。このおばんちゃんが私を抱っこして、毎日毎日、本を読んでくれたそうです。何の本か分かりません。三冊しかなかったそうです。

このことは私の「三つ子の魂」になったのです。その後、私は本の好きな子で通ってきました。今も好きです。それに今では読んで聞かせるのも、語るのも大好きです。私は今、私のおばんちゃんになっています。

私に素敵な出会いと生き方の種を蒔いてくれた人、おばんちゃんありがとう！

壬生町 橋田智恵

読書のよろこび

寝床の周囲にまた本が並び始めた。

本に親しむようになったのはいつの頃か。思い起こせば小学校の高学年の授業にさかのぼる。いろいろな教科があったにも

かわらず、算数の九九をいつの学年に教わったのか思い出せないのに、国語の時間だけは鮮明に思い出される。

五年生だったと思う。教科書を一人が音読をする。つまりいたら気がついた者がささず読み継ぐ時間があったり、読んだ本を級友の前でそらんじて話を聞かせる時間もあった。誰が何を話したのか覚えてはないが、自分は「おむすびころりん」を話した。

六年生になって、三浦敬一郎さんの子どもの頃スキーを習う情景(ここで中学生になって教わる英語の一つの単語を覚える。CARELESS・不注意な)、炭焼きの技術を親が子に教える(ここで炭に適した木、木をかまにつめる方法、木が炭になると煙が紫色になることなどを学ぶ)。芥川龍之介の「トロツコ」は、家のそばで河川工事が始まっていて、物語の子どもと同じスリルを味わった。

今のように学校全体の図書などなかったが、各々の学級の教室内に、生徒から見て黒板の右側に、縦一メートル横九十センチ程の本棚が備え付けられ、学年向けの本が納められていた。

「神州天馬侠」「ノーチラス号海底二万里」(ここで潜水艦を知る)、「巖窟王」に胸をとどろかせ、「孝女白菊」「ブラックビューティー」(黒馬物語)「母を訪ねて三千里」に涙を流し、「ファーブル昆虫記」「シートン動物記」では人間以外の世界に魅せられた。業間の休み時間は、もっぱら本棚の本を読むのに費やされ、読むのに家にも借りていった。とにかく予習、復

習とかの覚えはなく、教科書以外の本をひたすら読みあさった。中学生になってからはちよつと背のびして大人の本に手を出したり、世界文学全集とか日本文学全集とかの大作に挑戦した。フィクションあり、ノンフィクションあり、手あたり次第むさぼり読んだ。

とにかく小学校の国語の授業が発端となって、活字の魅力にはまりこんで抜け出せないでいる。文字により時空を飛んだり、その場所にいかなくとも物事が判つたりと、本に向かい合つて五十年余、寝る前の一服は新聞や本を読むことに喜びを感じる今日この頃である。

塩谷町 齋藤 カツ

若き日の読書

農家に生まれ育った私。幼い頃、「桃太郎」や「一寸法師」等々の昔話は知ってはいたが、親が読み聞かせてくれたのか、祖母が話してくれたのか、定かな記憶はない。多分、子どもの世話は、祖母の役目のような家だったので、祖母からの話を聞き覚えただろう。どう考えても、読書環境の整った家に生育したとは思えないし、読書好きな少女であったとは言い難い。

私が本の面白さを知ったのは、小学五年の時の担任の先生が、よく少女小説（吉屋信子の作品が多かった）を読み聞かせてくれたことに起因すると私自身は思っている。

敗戦の色濃い昭和十九年、女学校に入学。当時農家は人手が足りず、子どもといえども農事・家事を一人前に課せられるのが常であった。我が家とても例外ではなく、学校から帰るとすぐ家事を手伝わされ、休日には、農作業を手伝わされた。「本を読むなんてとんでもない。」「読む暇があれば家の手伝いをしろ。」と叱責された。したがって本を読むのは、勉強しているふりをしながら、夜、家族が寝静まってからという状態であった。しかし、小学生時代に覚えた本へのあこがれは抑えがたく、友達から借りたり、家にあるわずかな本、雑多な本を読んでは欲望を満たした。

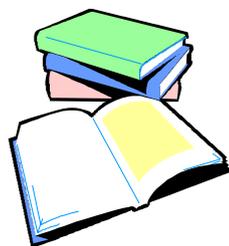
当時我が家には、不思議なことに、婦人之友社の羽仁もと子著作集の一部があった。——多分叔母が読んだものと思うが——その中の「家信」「若き姉妹に寄す」は、今でも心に残っている。夏目漱石・芥川龍之介など文学史上に残る作品も次々と読んだ。中でも「こころ」での深層心理の描き方に興味と感銘を受けた。その他、政治や思想に関する本や大衆小説などに心ときめかせたこともある。

学制改革により、女学校が、中学・高校に変わり、大学進学の前までには、世の中も平和・民主主義等が一応形をなし、学校図書館も充実し、そこに入ると、読みたい本にすぐ手が届き、

あれこれ読みあさるのが楽しく嬉しい時を過ごすことができた。学校の往復など、友達と読後感などを論じあったのも充実感のある懐かしい思い出だ。かなり背伸びをして生意気な論じ方ではあったが。

現在のように、ちまたにたくさんの本があふれ、読む時間もたっぷり与えられ、読書指導も盛んなよき時代に、活字離れ、読書離れが問題となっていることは、何とも皮肉なことである。

西方町 女性



経験こそ宝物

もう三十年ほど前のことです。

社会人になって十数年を過ぎた頃、市役所に勤めていた私は何回もの人事異動により、いろいろと悩む日々が多くなりました。

そんな折、いつも私を励ましてくれたのは今は亡き父でした。新しい職場での慣れない仕事に失敗したり、全く考えの違う人

たちに出会い驚いたり苦しんだり、さらに仲の良い友人でさえ時として意見が合わず戸惑うことがありました。しかし幸せなことに、父は自分の子どもに味方することなく、いつも冷静に私の話を聞いてくれました。

丁度その頃、新聞の広告欄に「経験こそわが師」という本のタイトルが目に入りました。父がいつも話の最後に言ってくれた「自分以外の人はみんな自分を育ててくれる先生なんだよ。」の言葉にピッタリの本に出会ったと思い、すぐ買い求めました。著者の扇谷正造さんは「人は『人生大学』で学ぶことが多い。」という体験豊かな経歴の持主です。働く者の生きがいや知恵を、たくさんの事例を通して分かりやすく書かれた本でした。

「経験ほどすばらしいものはない。たとえそれが失敗に終わろうとも、何もしないよりはるかに意義のあることだ。」というのです。また、「人はミスをおかし、恥ずかしい思いをし、その都度成長していくものかもしれない。」という言葉にとても励まされました。この本を読む前は自分だけが失敗ばかりしているように思え、夢も希望もないほど落ち込んでしまったのに、読み終わった時のあのほっとした気持ちは、何ともいいようのない安心感となりました。

そして今、介護度四となった九十三歳の母を看取る毎日となりました。寝たきり老人にさせないよう、足がすっかり弱った母を抱き抱えながら部屋を移動しています。これも母が「老いの日々とはこのようなものよ。」と老いに向かって歩きはじめ

た私に教えてくれているようです。そう考えると母は老人学の大切な師なのだと思えてなりません。はるか遠い日に読んだ一冊の本は、その後の私の人生にすばらしい道しるべを与えてくれました。

足利市 女性

絵本との出会い

幼い頃、戦地から帰って来たばかりの父が、おはなしや童謡を歌って聞かせてくれました。それを私は子守歌のように聞いて「今日はどんなおはなしが出てくるのかな？」と楽しみな一時でした。そのうち弟が生まれ、二人で毎夜父の物語を聞きながら眠りにつきました。

小学生のころは「幻灯」もたくさん見せてくれました。中でも影絵のような「蜘蛛くもの糸」には強烈な印象があり、未だに残像のようによみがえってまいります。

社会人になって、老人ホームの利用者のために芸を披露することになった時、大型紙芝居を作りご覧いただきました。この紙芝居は学校、自治会、老人会など、いろいろなところで実施しましたのでポロポロになってしまいました。

それからしばらくして町の図書室から「絵本を読んでみませんか？」との案内を見て、私は早速会員になりました。会員となった方は十人くらいでしたが、仲間が「子どもたちに絵本を読んでもあげたい！」ということになり、やがて「読み聞かせの会」ができました。公民館の図書室で始めた「読み聞かせ」も毎週となると、子どもたちが集まらず、学校への進出を試みしました。ちょうど運も良く学校からの依頼も順調に増え、年間七十余回を重ねることも数年続きました。今私は休会中ですが、今でも学校への活動はもっと増え、年間の大切な行事になっていると伺い、大変嬉しく思っております。

小さい時からの「おはなしを聞く」ことから始まり絵本を読む会に入ることがきっかけで、他のいろいろのボランティア活動に入ることになり、今では多くの人たちと知り合うことができ、赤ちゃんから高齢者まで、町中どこへ行っても知人がいて、とても楽しい毎日です。

思えば「絵本を読んでみませんか？」のさそいに乗ったことからの発展で視野が広がり、行動も活発になり、人と話をすることも好きになりました。ほんとうに不思議な縁だと思いますが、私にとっては有難い絵本との出会いでした。



益子町 女性

本のおつきあい

今までの本のおつきあいを考えると、環境が良いというのか、実家が書店を経営していたので、子どもの頃は手の届く所に絵本も児童文学全集も並んでいた。気に入った本をいつでも読むことができたのだから幸せなことだったが、この頃に残った本はと考えると思い浮かばない。きつと手当たりしだい本をめぐっていただけなのだろう。

高校時代、学校の図書館で出会った一冊の本、マーガレット・ミッチェルの「風と共に去りぬ」は、読み出したら止まらず、定期試験の前にもかかわらず、スカーレットの勇敢な生き方と美しさと強さに引き込まれ、徹夜で読んでしまったことがある。しばらくは、自分が南北戦争の時代にタラの農場やアトランタの町に住んでいるような気分になり、レッド・バトラーの男性的魅力にはまり夢中になったものだ。

娘が高校生の時この本を薦めたことがある。どんな感想かと尋ねたら「あんなに自分勝手に生きてきたスカーレットは、アレッシュの優柔不断さが見抜けず、結局バトラーの愛情も失った周りが見えない不幸な人ね。」と言った。私は読んだ後も何日も興奮していたが、娘の方が現実的だ。なる程本を読んでそこから得る思いは人それぞれなのだ。

しばらく本のおつきあひも途絶えがちだったが、嬉しいことと最近お友たちから読書会にさそわれた。月に一回図書館で

開かれる十人程のメンバーで二十年の歴史がある会だという。良い機会と思い、またこれからどんな本とおつきあいができるか楽しみにしている。

佐野市 女性

本と人との出会い

「毎日、ただぼんやり過ごしています。何のために生きてるのか。張り合いもなく、そんな自分がとてもみじめで、みじめで。」

小雨の降る朝でした。ごみ処理場で久し振りにあったKさんから、ふともらされた淋しそうなことば。

「此の間おあいした時は、忙しそうに草とりをしていたのに、どうしたの。」

心もち面やつれし、元気がないKさんのことばに内心驚きと共に、どうしたのかなと不審の気持ちでいっぱいになりました。雨の中の立ち話でもと思って、少しの慰めのことばをかけただけで「またね、元気だしてよ。」と行ってそのまま別れてきました。

Kさんは、早いうちにご主人を亡くし、その上たった一人の

息子さんにも急死され、今は一人で畑の仕事をしながら生活しているのです。Kさんのあの言葉と、面やつれした姿が気になっていましたが、なかなか時間もとれない日が続きまして。しかし、どうしても心にかかっていたので、数日後Kさん宅に出掛けていきました。矢崎節夫さんの著書「金子みすず・この宇宙」という単行本を持って。「雨の日にでも、読んでみて。私もすぐ気に入ったの。」と行って雑談をしたあと、その本を置いて帰ってきました。

二十日くらいたったある日。「こんにちは！」と玄関に訪れたKさん。みちがえるような明るい笑顔で。「有難うございました。感動しました。自分の環境があるがままに受け入れることが幸せの近道なのだと思います。この本を読んで、前向きに生きようと思いました。」と言うのです。私もこの本を何度も繰り返し読んでは、心が洗われていたので、心を閉ざしていた彼女に薦めてみたのです。

二十六歳の若さで夭折した天才童謡詩人金子みすずの生涯を美しい詩と共に綴ったこの本で、彼女は何をわかってくれたのでしょうか。自分のせまい小さな世界でなげき、くよくよしていたことを反省してくれたのでしょうか。「生きる」ことの大切さを感じ取ってくれたのでしょうか。特に、

「この裏まちの／ぬかるみに／まるいお空がありました。とおく／とおくうつくしく澄んだお空がありました。この裏まちの／ぬかるみに／深いお空がありました。」

の詩が、彼女はとても気に入ったということでした。

味気ない一人暮らしの自分も、自然の美しさ自然の偉大さに感動し、環境にもめげず前向きに生きていこうと決心したそうです。

伏し目がちに、寂しそうに、青白い顔をしていたKさんが、一冊の本との出会いにより、自分の生き方を見出し、明るく立ち向かっていこうと決意して下さったこと。私自身も深い感動をおぼえました。

この金子みすずの本の中で、小学生の男の子が、「みすずさんの詩は、百科辞典です。普通の百科辞典では得ることのできない『やさしさ』がいつぱいつまっています。これからの時代、この百科辞典の中身のような優しい世の中になってほしいです。」と綴っていたことを私も思い出しました。

人の心の優しさや、明るく生きるということをこの本を通して知ったKさん。閉ざされていた心を開き、これからは目標をもって生きていこうとする勇気と生活の指針を見出し出してくれたのだと思います。

私の薦めた本を通して心の安らぎを感じてくれたこと。生きる力を見出し生活に大きな自信をもってくれたことに、私も何にかえがたい喜びと感動をおぼえました。

私自身、あの本との出会いに感謝し、これからも私の励みにしていきたいと考えています。

藤岡町 女性

本がつなぐ三世代

高校時代、恩師の「二十歳を過ぎても本が読めるようなら、一生読み続けることができる。」の一言を支えに、それから五十年、古稀こきを過ぎた今でも本が大好きな日常をおくっています。

佐野市立図書館創立二十周年記念事業のひとつとして昭和四十六年十一月に発足した、佐野婦人読書会に参加し、現在も入会して居ります。当時、市内の小学校PTAの三十名のお母さんたちからの会員構成でした。読書を通して時代に即した生き方を学ぶには、当時は最高の場でした。

しかし、PTA活動の終わりと共に、多くの人が去っていきました。その後も年を重ねるごとに、健康を害し本を手にする事が苦痛になった人たちが、八十歳を過ぎても参加し続け、無念の病であの世に旅立たれた人など、多くの仲間との別れがありました。今は八名となりましたが、月一回の図書館での会、年二〜三回の文学散歩など続けています。

昭和十六年、小学校に入学した私は、家にあった分厚い表紙の子ども用の世界文学全集とか、日本昔ばなしなどを読みました。「ああ無情」「小公子」「小公女」「宝島」「ピーターパン」。そして、「孝女白菊」「怪談」「青葉の笛」などです。

そして志願兵として南の海に散った兄から送られてきた、「南国の水牛」と、その世話をするトッピー少年の話の本を、今でも鮮明におぼえています。母はそれをあの世界に持って行って

しまいました。その母が特に本好きだったので、戦後もたくさん本の本に囲まれ幸せでした。が、食糧難のためいつも空腹でした。本の中にパンやごはんなど食べ物が出てくると、たまりませんでした。

私が本を読むということは、この頃から現実逃避が一番の目的といっても過言ではありません。よく、登場人物になっている私を見て、家族がおどろいていた笑話もあります。

二人の息子たちにも「ずかん」から始まり私が読んだ本も多く読みかせ、読ませました。

「路傍の石」「壺井栄全集」「ビルマの豎琴たてこ」、そして、いわさきちひろの「戦火のなかのこどもたち」、私の記録も載る戦争で兄を亡くした「妹たちのかがり火」も与えました。そして親子三人で、小さな我が家の読書会も兼ねて話合いも持ちました。

やがて、孫の時代に入り、次男は二人の子どもに、愛読書の「三国志」から名前を付けました。崇暁（タカトキ）、誉彬（モトアキ）なかなか一度では読めません。

昨年、私の七十歳の誕生日から少し過ぎた頃、長男の小学一年の息子が突然泣いたとのこと、理由はお祖母ちゃんが老人なでもうすぐ死んでしまうので、かわいそうだとのことでした。私は自分の本箱から「千の風になって」の絵本を送りました。十二行の詩が、祖母にできる答えでした。詩と同じような考えはいつも私にはあったのです。孫は学校の図書室にもその本は

置いてあったと報告してきました。おどろき、嬉うれしかったです。今年の夏休み、孫は谷川俊太郎の絵本「がいこつ」も読みました。ボクと亡くなった女の子のお話です。二年生になり、死と素直に向きあっているようです。

読書感想文は「ぼくのえんそく」、自由課題を選んだとのことです。かぜを引いて遠足に行けなかったぼくが、気持ちにならなうのを楽しみにしています。孫たちと本の話をして、三代の我が家の小さな読書会を開くことができるのを願っています。



佐野市 鈴木 勝子

心
の
か
け
は
し

音読でつながった感動

孫が四年生の時、私に国語の教科書を、たびたび音読してくれました。それは、説明文であったり、詩であったり、物語の一節であったり、ジャンルは様々ですが、読んだ回数を、表に押印することになっていました。音読が宿題になっていたので、度を重ねる毎に内容を把握できてくるのでしょうか、気持ちが生に表現され、聞いている私にも、それがよく伝わってくるのです。話題は内容に及び、「たんぽぽのわた毛って、そうやって散っていくのね。」等と私が興味を示すと、得意になって、話ははずみます。

実は、私は黙読が苦手で、読書していても内容がよく把握できない部分に出くわすと、声を出し、節を切って納得しながら読まない、どうも文章の言わんとすることが掴めないのです。ですから、早読みは大の苦手で、ただ文字面をたどるだけになつてしまいます。

書く時も同じです。途中でときどき声を出して読み、読み手に理解してもらえるかどうか等、確かめながら書いています。すると欠点がはつきりわかってくるので、音読はかかせません。

私は、かつての小学校教員時代、六年生の国語の授業で、ひとつの物語の読み取りの学習の締め括りに、その物語を私が朗読しました。読み終わった時、「ああ、僕の読んでいた物語とは別の物語のように聞こえた。よかった！」と思わず声を出した子がいたのです。

決して上手な読み方ではなかったでしょうに、子どもたち自

身で精一杯読んできても汲みとりきれなかった主人公の気持ちや背景が心の中に広がって、物語を全体的にとらえることができ、感動することができたのでしよう。

また、かつての担任だった子たちの集まりに参加した時「先生に読んでもらった『ピルマの竖琴』^{たてこ}今でも思い出すよ。」と、私自身が感動の涙をおさえながら読み語った物語が何人も子どもたちの心の隅に、大人になった今でも残っていることに、自分も心を熱くしたものでした。

私も、自分が戦中の子ども時代、担任の先生に「愛の学校」を読んでいただく時の楽しみは、今だに忘れることができせん。

音読を、読み手聞き手が年齢を問わず素直につながれる機会の一つととらえ、機会あるごとに、それぞれの感動を思いの中に受け止めあつていけたらいいなと思いつけています。

上三川町 女性

ああ玉杯に花受けて

昭和十六年に、小学校を卒業したばかりの少年二百余名は、古河工業日光精銅所の技能者養成工として入所した。養成工は午前中は新しい校舎で工業の勉強をし、午後は工場で仕事を覚えるのである。この十二歳の少年の大多数は親元を離れて会社

の寄宿舎で共同生活をするのであった。私は家の都合で一月ほど遅れて入った。知らない顔ばかり心細さにぼんやりしていると、初めて声をかけてくれたのは隣の室長だった大山である。

数日の後、大山より借りていた小説「ああ玉杯に花受けて」を返しにいくと、「少し散歩でもしないか。」と誘われ、二人で外に出た。二人は大谷川の河原の石の上に腰かけ、男体山を見上げていた。

小説は、孤児のチビ公が叔父の豆腐屋で働きながら、旧制の第一高等学校に合格する話である。この一高と海軍兵学校は受験の難関中の難関と言われていた。

黙って山を見ていた大山は、急に振り向き、「俺は工員で終わるつもりはない。上級学校へいきたいと思っているが、君は……。」と聞いた。私も同じようなことを考えていたので、すぐに賛同し、二人で頑張っつて一緒に勉強することにした。

上級学校に行くには、まず現在の大検のように、専検（専門学校入学資格検定試験）に合格しなければならぬ。合格しなければ、上級学校の入学資格がないのだ。二人はそれから毎夜眠くなると、「チビ公、チビ公。」と呪文じゆもんのように唱えて頑張った。

昭和十七年の新養成工が入所してくると、大山も私も選ばされて、新入生の寄宿舎の班長となった。しかも同じ班だった。それから一層大山との親交が深まっていった。

昭和十八年夏、私はあこがれの予科練を受験した。試験場は栃木中学。午前は身体検査。身長、体重、胸囲の順に計測し、次に肺活量。「五七〇〇」の値に「ホー。」と試験管。次は視

力検査。右〇・八、左〇・七。ああ近視で不合格。

大山は秋に陸軍兵器学校を受験、何と七百二十人の受験者中十三名の合格者の中に入ってしまった。神奈川県神奈川県の兵器学校に入隊した大山は、電波兵器科に配属になった。同僚は大学や専門学校の出身者ばかり、小学校出は大山一人で苦労したことを、終戦後話していた。

彼は、戦後東京に出て、電機工事の会社に就職し、勉強を続けて一級の電気技師の試験に合格した。大山と私を結びつけてくれたのは、小説「ああ玉杯に花受けて」のチビ公ではなかったかと思っている。



那珂川町 男性

本は心

図書室は楽しい。夕方のシーンとした図書室の椅子いすに座って、整然と並んだ本の背を眺めると、子どもの頃夢見た世界やあこがれ等、様々な想いが湧きあがってくる。

明智小五郎、ペリー・メイスン、エラーリー・クイーン、アルサーヌ・ルパン、シャーロック・ホームズ、オーギュスト・デュパン。

夜を徹して謎解きをした。

「アラジンと魔法のランプ」「アリババと四十人の盗賊」小学生時代は、イスラム世界の存在は物語の中だけのことと信じていた。

私は現在、小中学生とその保護者を対象に教育相談の仕事をしている。最近、子どもの頃夢中になったこれらの本が、教育相談をするうえで、大きな役割を果たしてくれることに気付いた。

私の相談は、小学校の図書室にやってくる児童との何気ない会話から始まることがある。

「アラジンって誰だか知ってるかい。」

「知ってる。テレビアニメで見たことある。」

「絨毯に乗って空を飛ぶ場面があるんだけど、覚えてる？」

「ランプの精も出てくるんだよね。ぼく、マンガでも読んだ。」

子どもは、自分の興味あるシーンはしっかりと記憶している。

「あのアラジンのお話の本が、これなのよ。私が最初にこの本を読んだ時は、ランプのことがよくわからなかったの。」

ちようど布を織っていくように、本の話は私と子どもとの心の絡み合いを深くしていく。次には、「学校の怪談」の話になり、それから子どもは、自分の兄や姉の話、父母や友だちのこと、好きなこと、とさまざまな話題が出てきて、いつの間にか教育相談をしている自分に気付かされる。そして、にこにこ可愛らしい子ども表情のかけに、親への思いや願い、日常の小さいトラブル、気付かない劣等感など、意外に複雑な感情があるのを知らされる。

子どもの性格や考え方のパターンを理解するためにも、本の話題は適切な判断の役目を果たすことがある。

ある時、こんなことがあった。小学一年生の女の子が、本のページを開いて私に尋ねた。

「この『いぬがじぶんのしっぽをすきなよりも、もつといっぱい』ってどんなことなの。」

開かれた本の表紙を見ると、アメリカの児童書の作家バーバラ・ジョシーの「かあさん、わたしのことすき？」という絵本である。アラスカのイヌイットの生活の様子の絵が、すばらしい色彩で描かれている。

「とってもいい本を読んだのね。あのね、犬は自分の気持ちをもつぽであらわすの。つまらないときも、うれしいときも、どんなときでも犬の心はしっぽを見るとわかるの。だから犬はしっぽがとても大切で大好きなの。この本のお母さんは、犬がしっぽを好きなよりも、もつともつといっぱい、自分の女の子が好きよって言うてるの。いいお母さんよね。」

私はこのすばらしい絵本を初めて見た。
「私のお母さんも、私のことを大好きだった。」

ああ、すばらしい母がいる、と私は思った。これがきっかけになって、その子といつも絵本の話をする。話を聞いている時は、大人と子どもではなく、絵本の登場人物が好きな同じ心の二人であり、同じ感動をした親しい人間同士である。

本は、様々な心を持って、すばらしい人と人とのつながりを作ってくれる、といつも思うのである。

本ってすごい

育子さんとの友情は一冊の本から始まりました。本の内容は今となつてはおぼろげになってしまいました。外国の動物の物語でした。

当時は戦後間もない頃で、学校の図書室には本があるにはあったけれど、表紙がなくなっていたり、めくれ癖がついていたりで、多くの中学生が読んだであろうことがはっきりわかる姿をしていました。それでも本に飢えていた中学生は暗くて狭い図書室に、絶えることなく群がっていました。

育子さんと感動を共有した本は、装丁が比較的しつかりしており、嬉しいことにところどころにさし絵がありました。ほとんどが狼の絵で、どこか哀しげな遠いまなざしをしたさし絵が印象的でした。育子さんとのふとした会話の中でその物語の描写やさし絵のことがこぼれ、夢中で感動を語り合いました。そして一冊のノートに、本を読んだお互いの感想を書き合うようになったのです。ことに動物の愛情の深さには涙してしまいました。ノートには気に入った表現描写なども書き写し、涙ぐんだり大声で笑い合ったりして、想像や空想がふくらんでいったと思います。今思うとほんとうにたわい無い遊びでした。それでも「本ってすごい」ことを中学一年の時に初めて実感しました。

育子さんはたくさん本を読んでいて、それも驚きでした。ノートから気づかされるが多くあり、また心が豊かで感化されることばがずいぶんあったと思います。

今この文章を書いていて、その頃の思いがよみがえり、大切な思い出だったのだと気づかされました。友情が一番の宝物として育まれていたのでしょうか。

教職に就き仕事に没頭の日々がきましたが、時代とともに読みたい本は大体手が届き、読めるようになりました。その中で新聞の連載小説は気軽に読めて楽しみでした。何分とかわからず読めるし、気を持たせる部分で明日へつなげるという書き方が巧みで、「作者ってすごい」と思いました。アウシュビッツのことを知ったのもその時です。自分がよく知らずにいた世界が描かれ、胸が塞がる思いで読んだものです。このことを子どもたちにも知らせたいと思い、朝のホームルームのわずかな時間を読んで聞かせました。生徒たちはしんとして聴き入り、驚いているようでした。連絡事項が多くて読めない朝は、明日必ず二日分読むことを約束させられました。二週間ぐらい読んだところで余儀無く中断することになってしまいました。戦争の悲惨さが少しでも子どもたちの胸に響けばと思つたことでした。

その後、一人の生徒が「先生」とやってきました。お母さんから、新聞小説の題名と作者と新聞社を先生に尋ねてくるように頼まれたというのです。私は嬉しくてすぐに教えました。家庭で話題になったというのです。一人の胸にしまっておけなかつた子ども、その話に飛びついてきたお母さん。そしてもっと詳しく知りたくなった……。明るい灯の下での親子の会話が目に浮かびました。

私たちを知らない世界へ、驚きの世界へいざなってくれる本。

ときにはのめり込んで悲しんだり怒ったり、ひとすじの道が開けてきたり、そしてかけがえのない友情が生まれることも。「本の力ってほんとにすごい」と思いました。

高根沢町 藤井 英子

本は心のかけし

「アルプスの少女ハイジ」私が初めて出会った本だと記憶している。父方の伯母が持ってきてくれた。小学校入学前だったと思う。ハイジの可愛らしい姿、アルプスの雄大な山並み。何だかとても心がワクワクしたのを覚えている。この一冊が私の心に本を読む楽しみの種を播いてくれたと思う。それから伯母は折に触れて本をプレゼントしてくれた。

小学校に入ってから、学級文庫や図書室の本を読みあさった。私が何年生の頃だったかはつきり覚えていないが、図書室に専任のお姉さんが来た。高学年になり私は図書委員になった。その図書室のお姉さんと本の話をしたり、本の整理の手伝いをするのがとても楽しみだった。卒業間近のある日、このお姉さんが「ちよつと難しいかも知れないけど読んでみない？」と薦めてくれたのが「アンネの日記」だった。当時はやはり難しく読んで読みこなせなかった。でも時々折に触れ思い出す大切な一冊である。

ずっとずーつと後になって分かったのだが、この図書室のお姉さんは、定時制高校に通う生徒さんで、昼間は私たちの学校の図書室で働いていたのだ。私はこのお姉さんのおかげで、とても幸せな小学生時代を過ごすことができた。図書室にこういう常勤の人がいて、ちよつとしたアドバイスをしてくれると子どもの読書の幅もずいぶん広がると思う。

大人になり、あこがれの図書館に職を得た。それが縁で読書会にも入れていただいた。

やがて結婚して子どもを授かった。「親のつとめとして読み聞かせは当然でしょ。」と折に触れ、息子には本を読んでやっていたつもりだった。しかし、息子の興味はいつこうに活字に向かない。彼の興味はファミコン、テレビのヒーロー等々ばかりである。少し見る活字といえばマンガ！私のあの読み聞かせは何だったのだろう。「義務感でやっているというのが、息子にも伝わってしまっていたのかな。」と落ち込む日々が続いていた。

縁あって「語り」の勉強をするようになった。「自分の子どもを本好きにすることができなかつた罪ほろぼしに。」などという思いも少しあって、細々ながら小学校で子どもたちにお話（素話）を聞いてもらっている。お話をきっかけに子どもが本を手にとってくれて、少しでも本好きになってくれるといいなと思う。スーパードなどで会うと「お話のおばさん！」なんて声をかけてくれる子がいる。嬉しいような、こそばゆいような気分になる。

嬉しいことが他にもあった。昨年、所属している読書会で、

直木賞受賞の石田依良著「十四フォーティーン」を読んだ。その同じ時に、もう大学生になっていて息子が、同じ文庫本を抱えて帰省した。「この本おもしろいよ。俺も佃島おれのあたりを自転車で走り回って見たいな。」等々とのたまう。へえー、中身ちゃんと読んでいるんじゃない。息子も少しは活字に興味を持つようになったんだ。息子の幼い頃一所懸命本を読んでやっていたのも、まんざら無駄ではなかったんだ、とちよつぱり気を良くしている。

若い頃から仲間に入れていただいているあの読書会は、もう三十年以上も続いている。メンバーもほとんど変わらず、三十三数年みんな一緒に年を重ねてきた。メンバーの全員が私より少し年上なので、今までの私の人生の良きアドバイザーでもあった。文学散歩に出かけたり、お芝居を見たり、本を読む以外にも楽しいことを一緒にいっぱいやって来た。気心も知れていて共通の話題も多い楽しい仲間がいるのは心強い限りである。老人会のようになっても続けていきたいものである。

足利市 女性



「夜と霧」とK先生

高校一年の時、担任の若いK先生が生物の授業の中で「夜と霧」の話をしてくれました。それは第二次世界大戦末期の Auschwitz 強制収容所における著者フランクの体験から深く人間を考察したものです。ドイツナチズムの下にくり広げられるユダヤ人抹殺計画の惨劇の事実と、そこに生き抜いた著者の精神科医としての分析が紹介されました。私はその悲劇に瞠目し、それが人間なのかという驚きと胸を締め付けられるような重い感情が残りました。

その日帰宅するとまっすぐ本屋に向かい、「夜と霧」を探し出して購入しました。強制収容所の不合理な暴力と飢餓、そして過酷な強制労働の下で死と隣り合わせに生きる究極の状態の中で、人間を見つめる目と心の内面へと深まる思索に引き込まれたことを思い出します。何の強制もなく部屋の中で読書をしている私は「自由」という概念を初めて認識し、新たな世界観が広がったものです。

やがて私も教師になりましたが、恩師であるK先生と勤務校が一緒になることはありませんでした。そして同じ市内に住みながら訪ねることもなく、「夜と霧」の話に衝撃を受けたことを打ち明けることもありませんでした。K先生はすでに泉下におられます。東北のN高校の教頭として在職中に若くして病没されました。

私はこの春、人間ドックで以前から自覚症状のあったある病を指摘され、専門医の診察を受けて薬局に入ると、恩師と同じ

姓の名札を下げた薬剤師が私の差し出す医師の処方箋を受け取りました。そこで医師と同じように症状を問いただすので、もう一度説明しなければならぬ煩わしさに不満を感じました。

その後何度か病院と薬局に通ううちに、もしや恩師のご子息ではないだろうかと思ひ尋ねてみました。

「あのー……もしかして、K先生の息子さんではないでしょうか？」と、初日の気まずい会話を謝るように少し腰を折って尋ねると、

「はい、そうですが。」と、明確な返事が返ってきました。

「先生は私が高校一年の時の担任でして……」などと、口ごもりながら説明すれば、

「そうでしたか。」と、私に向けた彼の笑顔に恩師の面影を見いだしました。

「もうお亡くなりになって何年になりますか？」

「そうですねー……三十年ほどでしょうか。」

近年、年月の流れを早く感じる自分ですが、本当にそのような長い時間が経過したのだろうか戸惑いつつ、彼の手渡す薬を受け取りました。

夏の熱い日差しの中を帰路につき、三十年前という恩師が逝去された昭和の年代を逆算しながら、「そうだ、もう一度あの『夜と霧』をじっくり読み直してみよう。」と思ひ立ちました。

どんな状況の中でも生き抜くという自覚を与えたフランクルの「夜と霧」、それを熱く語って聞かせてくれたK先生は、青春の思い出とともにいつまでも忘れることはありません。

那須塩原市 月江 寛智

絆をつよめた文学散歩

「さあ、たくさんお飲み。」

と、古い小さな墓石に井戸水をかけてあげたのは、今から何年前になりましょうか。読書会で「海嶺」（三浦綾子著）を読んだ、その舞台である知多半島の小野浦を訪れた時のことです。

嵐にあつて、遭難し漂流を続ける船の中では、飲料水の不足は死活問題でした。喉のかわきに絶えられず掬をよぶつて、夜中に水を盗み飲みした船員が見つかってしまいました。その時の船内の情景を思い浮かべた会員のSさんから、自然に発せられたことばであり、しぐさでした。「そうだよね。あの時は、船員の誰もが、どんなにつらかったことか。誰の体も水を求めていたんだからね。」

「宝順丸の乗組員十四名の詣りの墓」として置かれた古い小さな墓石の前で本を読んだ読書会の十名の気持ちは、一つに結びつきました。「さあ、お飲み。たくさんお飲み。」とひしゃくでくんではかけ、くんではかける会員の目には、涙があふれています。

さあ、お飲み

墓石にはねる清い水

本読む仲間の声やさし

誰かがこんな歌を詠みました。

あの時の一体感は、心地良いもので、会員の絆を確かにしようと思ひます。

他界した仲間、病気を得た仲間、年齢を重ねる度に活動は困

難になっています。それでも会員は課題図書を手集まっています。

次のすばらしい本に出会いたくて、二十数年続いています。

赤松読書会 小山市 尾島 栄

読書会と私

上の子が小学一年生の時、PTAで読書会が開催された。私は前から、読んだ本の感想を誰かと語り合いたいと思っていたので、入会することにした。だが、二歳の子を連れていかなければならない。会の皆さんに迷惑をかけるのではないかと申し訳のない気持ちだった。会場へ着くと、何人かの人が私と同じように小さな子ども連れで参加していたので、とても気が楽になった。

読書会では、当番の人が選んだ本を読み、その感想を話し合う。最初は緊張して一言も話せなかったが、回を重ねることに皆さんと打ち解けて話せるようになった。

二十代の時、一冊の水上勉の作品を読んだことがあったが、暗いイメージだけで何を語っているのか理解できなかった。ある日、新聞で、その作品を四十代の主婦が誉めたたえていた。私にはどこが良くて誉めるのか、その気持ちが分からなかった。読書会で、水上勉の作品「山門至福」を読み、その根底に流れる人間愛を見出し、深く感動した。「骨肉の絆」では

物なんてものはいつかなくなるものだから、永く残るのは心しかない」と書いてあった。日頃から物よりも遙かに心を大切に思っている私は、その考え方にとても惹かれた。前に新聞で読んだ主婦の誉めたたえていた気持ちだが、よく分かるようになった。読書会に参加していなかったなら、自分の好きな本しか読まなかったに違いない。

上の子が小学校を卒業した後も、子どもたちを連れて参加していた人たちが、各家を回り番で会場にして会を続けた。本を読むだけではなく、時には親子でうどんを打ったり、十二月にはおもちつきもしたりで、子育てをしながらの会である。紅（くれない）会として手作りの文集も何冊が出した。

あれから二十六年の時が流れた。子どもたちも社会人になり、会の仲間も四人になってしまったが、今でも月に一度集い、一泊の旅をしたりして親睦を深めている。

読書会に参加したことにより、決して読まなかったであろう本を読むことができ、そして私にとってかけがえのない友人たちと出会えた。



岩舟町 女性

読書を通して共感した日

「旅」と「読書」の好きな私は、旅先でしかない本を求めて読むのが楽しみです。

春に桜を見る旅をしました。その時買ったのが「生きよ淡墨桜」(桑原恭子作)です。それは枯死寸前、樹齡千四〇〇年の老木を見事に蘇よみがえらせた「樹医」を自称する土佐の前田利行の波乱に富む生涯を描いておりました。

私は、その時、何ともいえぬ感動の心に浸っておりまして。この気持ちを伝えたいという思いが広がり、近所の友人や姉にも薦めました。「とてもよかったです。」とのことば、その後、ふつとこの読後感をお聞きしたいと頭に浮かんだのは、恩師であり、読書家のK先生でした。すぐに奥様を通じて、「きつと共感するものがあると信じます。」とメモをはさんでお渡ししたのを覚えています。その後、返事が届きました。「本」は読書の喜び、心のつながりを生み、その証明をみた気がしました。

すっかり青葉の候となりました。ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

ところで昨日「きつと共感するものがあると信じます。」と書いて貸して下さった、「生きよ淡墨桜」前田利行の反骨の生涯、今読み終わりました。その性たるや狷介高潔けんかいこうけつ、されど口マンを求めつづけて、九十四歳まで生きたハイカラ医師の栄光と波乱の人生、その生き様に脱帽です。

いつだったか、私はこの「淡墨桜」の所にいったことがあ

りますが、こんな風にして蘇生そせいしたということは知りませんでした。

「はんの死」よき伴侶のはんさんの死には胸が痛みました。雨の六月七日、久しぶりに読書をし、至福のひとつときを過ごしました。

この手紙を読み、「本」は読者に年齢と関係なく、感動と喜びを与えてくれる「宝物」だと感じました。これからも、読後感を語りあえたらと思います。

「淡墨桜よ」春になり再び花を咲かせ、人々に春の喜びと「生き抜く力」を与えて下さい。読書こそ、人間に与えられた特権と信じています。そして、人生を豊かなものにしてくれるものと……。

「この夏はどこに旅しようか?どんな本にめぐりあうか。」心はずませています。

茂木町 関本 ナヲ

三回の出会い

最初の出会いについて、私が、本の読み聞かせにたずさわることになったのは、ある高齢者の方から、「子どもたちに本を読んで聞かせてあげたいのですが、どうしたらよいでしょうか?」と相談があったことからでした。この方は、永年看護師

さんをし、全国を歩いてきた九州出身の方で、退職をされてから私の住む地域に来られ、一人暮らしをしていた方です。

私は、たまたまその当時、朗読ボランティアをしていましたので、このような相談を受けたのかと思い、早速事情をお聞きしましたところ、この方の子どもたちに対する思いがすばらしく、「現在のような状況では、子どもたちがだめになってしまふ、小さいことだが、今の子どもたちに『本に対する興味を持たせたい。』』という、やさしい心の持ち主でした。その情熱にほだされ、私は、意思を無にしないためにも、会を立ち上げることとなりました。この人の、子どもたちに対する愛情とやさしい思いに感動すると共に、自分を見つめなおす良いきっかけとなったことが、一回目の出会いでした。

次の出会いは、本の読み聞かせをする仲間たちとの出会いでした。この趣旨に賛同する皆さんにお願いをしましたところ、お断りされた方もいらつしやいましたが、ほとんどの方が快く引き受けてくださいました。いろいろな方がいます。農業、主婦、自営業、元保育士、元教諭、会社員などですが、この人たちとの出会いが、すばらしいものであります。私の人生にとって大いになる勉強ができましたし、いろいろな経験の持ち主の方たちとの交流の中で、教えられることがたくさんありました。当然講習会などをし勉強もするわけですが、やはり多くの皆さんと出会えることは、人間形成の上でも大いに役立つものだと痛切に感じました。多くの人との出会いが、人間社会の生活をしていく上にいかに大切なものが、よくわかったのです。

最後の出会いは、子どもたちです。初めて子どもたちの前に立ち、本を読むという、今までに経験のなかったことを行うわけですから、どのような読み方をしたら良いのかとまどい、不安ばかりでした。しかし、なんとか本を読み終わった時、子どもたちが大きな拍手をしてくれ、「良かった。」といわれた時は、感激でわたしの胸はいっぱいになってしまいました。子どもたちのやさしさに助けられて、このときが終わったような気がします。次回からは心も落ち着き、なんとなく普通の読み聞かせができていたのではないかと、自分では思っております。

子どもたちは、月に二回ですが、この機会を楽しみに待っており、また、目をまん丸に大きく開き、真剣な表情で聞いている姿を見ると、わたしたちが励まされます。時々、お礼のお手紙をいただきますが、わたしたちの活動は、少なからず子どもたちに良い影響を与えているのだらうかと、自負しております。

このように、活動を続けて四年になりますが、子どもたちとの出会いが私の意識を変え、子どもたちも、私に対する意識が変わったような気がします。と申しますのは、私は今の子どもたちが、どんな考えを持ち、どのような生活をしているのかを知りませんでした。そのことを知りえたことと、子どもたちが積極的に私たちに話しかけてくるようになったことでした。

私は、読書を通じて子どもたちとの関わりをもってきましたが、地域の皆さんが、何らかの形で子どもたちと関わるのが、これからの子どもたちを健全に育成して上で、必要なことではないかと思えます。

「虹の会」の活動を通して

「静和地区にも読書グループを」との岩舟町役場からの問いかけに、当時の静和小学校PTAとその先輩の十名あまりが集まり、「読書会・虹の会」をつくったのは昭和五十四年のことです。

地元の公民館に月一回集まり、毎回二〜三時間、課題図書や自分たちで選んだ本の感想を話し合ったり、次回読む本の希望を出し合うなどして活動が始まりました。その中では、先輩たちの生活の知恵、子どもの教育話なども聞くことができ、その日の来るのがとても楽しみでした。また、二〜三年ごとに手作りの感想文の文集を発行し、これらを読み返す度に当時のことが懐かしく蘇り、今では私のかげがえのない宝物の一つとなっています。

平成になってからは、何人かの新人も入会し、町から朗読の勉強をする機会をいただきました。生まれ育った栃木弁は自分でも気が付かず、何回も直させられたけれども、何とかやり遂げることができたと思います。そして、町からは、広報誌や議会だよりなどをテープに録音し、視覚障害者の方々に提供するポランテニア活動の依頼を受け、新たな活動が始まりました。

それぞれの会員がラジカセを用意し、真剣に練習したことを、今では懐かしく思い出します。その後、先輩からの勧めで、日本財団に録音機器を購入する援助を申請し、運良く認められ、便利で立派な機材で録音テープを作成することができるようになりました。

そのころ、町文化会館の館長をはじめとする先輩から、木村光一氏作の「この子たちの夏」に取り組むよう勧められ、会員皆で練習に励みました。夏の季節になり、町内の小学校等に出向いて、高学年の児童や父兄の前で朗読会を開催しました。後に子どもたちからは「平和な世の中が幸せであること」や「戦争は絶対にしてはいけない」等の感想が添えられたお礼の手紙をいただきました。

現在も、月に一度先生の指導を受けながら、三年前からは、町内の二つの小学校に出向き、絵本の読み聞かせポランテニアも行っております。学校の帰りには、毎回子どもたちから元気のパワーをもらっているような気がします。

活動が始まってから三十年近く経過し、目も衰えつつありますが、今後とも、前向きな気持ちをもって頑張つて活動していきたいと思えます。私にとって、虹の会の活動とその仲間たちは元気の源でもあります。

岩舟町 女性

楽しい読書会

「子どもを大切にする社会は、同時に老人が大切にされる社会である。」とボーボワールは言っている。当時、椋鳩十の「母

と子の二十分間読書」は鹿児島を起点に始められた。私は、児童館の支援団体・母親クラブを運営していたので、会員二百五十名にこのことを働きかけ、運動の主眼とした。

児童文化は個々のものではなく総合したものである。初期的な絵本は身近なものでなければならぬ。二、三歳になると言葉を感じる。胎教というものもある。お母さんの読んでいるものを、覚える親自身の声で読む。会員の家庭は現在も、二十分間読書を続けている。

夏休みには、子ども会育成会と協力、図書室から児童書を借り受け、各戸に配布した。一人でも多くの子どもたちに本との親しみを。図書の貸し出しの行われていない郊外の小学校に、県立図書館より児童書を借り受け、貸し出しボランティアを校庭で行った。現在は市立図書館より学校に本を提供。平等の文化を共有している。

この世は受けと払いから成り立つ。YBCの読書運動。百以上を超える読書会の存在。この会から生まれた、朗読ボランティア、朗読の要点、聞きやすさ。素直な発音、正確さ。個々にも読解力につながる。原本に記載されている文字は、原則的にすべて読み取る。朗読は常に自己の知性と教養を高める。この音訳奉仕を始めて思うことは、学校における「読み」の学習は、やったのだろうかということだ。

先頃、県立盲学校の依頼により「おとぎ話」の音訳奉仕に取り組んでいる。私たちも忘れていた「昔話」に酔いしれた。

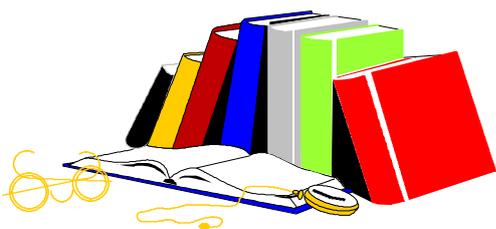
読書会の水先案内人である県。市図書館の熱意により、気の遠くなるような三十年の歳月をここにクリアした。本を読み、

語り合おうとする仲間たちは、読むという行為の基本を大切にしてきた。テキストの読みをいかに深めていくかを原点とするか否かで、その在り方がずいぶん異なるだろう。増田れい子著「母住井すゑ」を読み、私たちは、牛久沼を訪ねた。かつて志賀直哉が住み白樺派の作家たちが往来した我孫子市手賀沼のほとりにも。著者を身近に感じ、テキストの読みの深まりを促すことにもなる。

望むことはこの国の永遠の平和と、外国のように、老人ホームにも図書館を造って欲しい。

高いところから低いところではなく、共存の世界。手間、暇、惜しまず生きていきたい。

下野市 大山兼子



読書をめぐぐる思い

「かわいそうなぞう」をとおして

「ねえ、みんな上野動物園って知ってる。」「知ってる。」「知らない。」「子どもたちの反応は、様々である。

私は毎年夏になると必ず「かわいそうなぞう」を子どもたちに読んで聞かせる。

大東亜戦争の末期、上野動物園では、ライオンも、トラも、ヒヨウも、クマもだいじやも毒を飲ませて殺したのだ。最後に三頭のぞうも殺されることになった。わが子のように可愛がっていたぞうを殺さなければならなくなった、ぞう係の人のせつなさ、くやしさを、「戦争をやめる。」「戦争をやめてくれえ。やめてくれえ。」

「これは本当にあつたお話なのよ。」私は自分の戦争体験を重ねながら子どもたちに伝えてきた。でも子どもにはどんなふうに伝わっているだろうか。反応は様々である。

三十年前、はじめてこの本を手にした時、思わず涙があふれ読み進めなかったことを思い出す。今でも時折子どもたちの前で読みながら、涙がこぼれそうになる時がある。

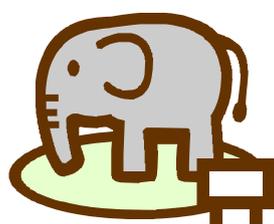
遠い昔、ある保育所で読み聞かせをしている時、年長児の女の子が、涙を一杯ため、「かわいそう。」「と、じつと本を食っているように見ていたあの瞳、今でも私の胸に焼きついて離れない。

今年もまた、暑い夏がやってきた。子ども館や学校で「かわいそうなぞう」を読んだ。何の反応も示さない子もいた。それ

でも、ひとりでもふたりでも、戦争の悲惨さを、恐ろしさをわかってくれたらよいと思う。

そして来年も再来年も「かわいそうなぞう」を読み続けていきたいと思う。

戦争のない、平和な日々を願って。



足利市 女性

新聞を読んで思ったこと

私の家では「日本経済新聞」を読んでいます。八月四日の夕刊の「クラスルーム」というコラムに載っていた記事を読んで、感動いたしましたので書きました。

お書きになった方のお名前の代わりでしょうか、文章の最後に「学校研究会」とありました。

記事の内容は、一学期末に開いた保護者面談の時一年生のA男君の母親が、開口一番「六年生に本当にお礼を言いたいです。」という。担任の先生は「えっ、なぜ六年生なの。」「と母親の話を聞きました。

A男は小学校に入学してから、幼稚園時代にはやったことが

なかった三歳の妹の世話をしようになったとのこと。おもちゃの片付けを手伝ったり、トイレにつき合ったり、絵本を讀んで聞かせたり、折紙を教えたり。他の六年生もぬり絵を作つて持つてきたり、一年生から一寸たたかれたりしても文句も言わずニコニコと相手をしているというのです。

一年生との接し方を一生懸命に考えて活動している子のお母さんは、「うちの子も早く六年生になって一年生のお世話をしてみたいな様子なんです。」と。

私はこの記事を読んで少なからず驚きました。

この六年生の子どもたちが大人になったら日本は思いやりのあるやさしい社会ができていくことでしょう。私たちのような高齢者にも障害者にもやさしい親切な人が多くなって、生きていく幸せを感じられる日本になるだろうと、心温かな気持ちになりました。



下野市 高山 登美子

おばさんのひとりごと

「絵本を通して「命の大切さ」を伝えたい」

お話しボランティアの活動が図書館以外にも大きく広がり、小学校での「読み聞かせの時間」に参加するようになりました。朝、授業開始前のわずかな時間ではあるけれど、「絵本の魅力を子どもたちに伝えたい」とテーマを持って読み聞かせの活動をすることにしました。

絵本の持つ魅力、それはあわただしい毎日の中で忘れていた大切なことにもう一度気付かせてくれるということ。自然を慈しむ心、素直な感動や本来の自分らしさを知ることができるもの。そして、命の大切さ 生きていくことのすばらしさなど絵本を通して子どもたちに伝えることができたらと思うのです。

「ダギーへの手紙」(エリザベス・キュプラー・ロス/文、アグネス・チャン/訳 佼成出版社)を小学校五・六年生向けに読み聞かせをすることにしました。この本の主人公、小児がんで余命三か月と言われた九歳のダギー少年は、がんで苦しんでいるときに「命って何? 死って何? どうして小さな子どもが死ななければならぬの?」と医師に手紙を書きました。大人たちは「いのちのこと、死のこと、何も教えてくれない。」と少年の悲しい訴えに胸を打たれた医師は「いのちと死」が同じ重さを持ったかけがえのないものであることを、木や花、季節に例えて返事を書きました。この手紙を読んだ少年は元気を

取り戻し、十三歳まで生活することができたということです。

命の尊さを教えてくれたこの絵本を子どもたちに読んだ後、同年代の子もたちはダギー少年の話をもどのように感じているのか、私はとても気になっていました。そんな時に、子どもたちからこの本を読んだ感想の手紙が届きました。

「生きる楽しさ、大切さを教えてもらった。」「今まで感じるものがなかった。『いのちのこと』や『死ぬということ』を知ることができた。」「いのちの大切さを知った。」

子どもたちは絵本が伝えたいことを、きちんと受け止めてくれたのです。

これから子どもたちに読み聞かせを通して、絵本のメッセージを伝えたいと考えています。

那須町 おはなしおばさん

かなえられたかぼちゃ作り

私は、昨年の三月に一冊の絵本と出会いました。以前から我が家の畑でジャガイモ作り等をした乳幼児とその母親たち二十数名から、「小野さんのイメージにぴったりだから。」と、絵本作家いわむらかずおさんの「14ひきのかぼちゃ」を手渡されたのです。

農業体験のない十数組の娘や孫のような親子は、開放した我が家の畑で、蒔き付けから収穫までの一連の作業を行ってきた。自然の中でワイワイ・ガヤガヤと土に触れ合いながら栽培し、本物を食べ、食の大切さを実感したそうです。私も農業者として、畑や作業の一部をお裾分けし、子どもたちの笑顔から元気をもらい励みとしていた間柄でした。

絵本のプレゼントという予期していなかった好意に、胸がジンと温くなりました。

早速めくった絵本のページには、十四匹のねずみの家族が、かぼちゃの種を命の粒として、蒔き付けから生育管理、収穫、そして食べるという命の営みが、短い言葉で克明に表現されており、あつたかーい気持ちになり感動しました。私にもねずみの家族と同じような営みがあります。しかし、今の家庭でこのような営みがどのくらいなされているのか考えさせられ、大切なことを忘れてるように思えました。

そして四月、私は絵本の感動を胸に「子どもたちのために畑を開放し、何か役立ちたい。」と地域の小学校を訪ね、校長先生に思いを伝えました。

それから一か月後、

「五年生（四十二名）が、総合的な学習の時間でかぼちゃ作りに挑戦したい。十四ひきのねずみが、かぼちゃを栽培したように。そして、収穫したら料理をして、みんなでおいしく食べたい。」

との返事をもらいました。私の夢は、いっぺんに膨らみました。

早速、地域の学校支援ボランティアから植え付け指導の協力を得ながら、四アールの畑でかぼちゃ栽培の物語が始まりました。

まず、「14ひきのかぼちゃ」の朗読の後、子どもたちは慣れない手つきで鋤を持ち、汗を流しながら、

「元気に育ってね。」

「おいしい実をつけてね。」

と、一人ひとりが主役となり、なごやかな雰囲気での授業となりました。

植え付け後は、登下校中の子どもたちや近所の見守り隊が、除草や敷きわらの管理を手伝ってくれました。子ども、先生、地域の人たちの愛情に包まれて、かぼちゃはたくさんの実を付け、収穫となりました。子どもたちからは、両手に抱えきれない程の手のひらサイズのかぼちゃに歓声が上がりました。

後日、子どもたちからは、「小野さんや見守り隊の皆さんのおかげで、立派なかぼちゃが無事に収穫できました。」「みんなで作ったかぼちゃで、どんな料理にするか調べているところです。かぼちゃパーティーが楽しみです。」

との手紙を添えてかぼちゃが届きました。私は、夢が実現できたことに安堵し、うれしくて早速、礼状の絵手紙を書きました。

一冊の絵本との出会いが、おせっかいな私に、子どもたちのかぼちゃ作りという夢を実現させてくれました。そして、動かなければ出会えなかった感動と、心のつながりを与えてくれました。今、「14ひきのかぼちゃ」は、新たな私の宝ものとな

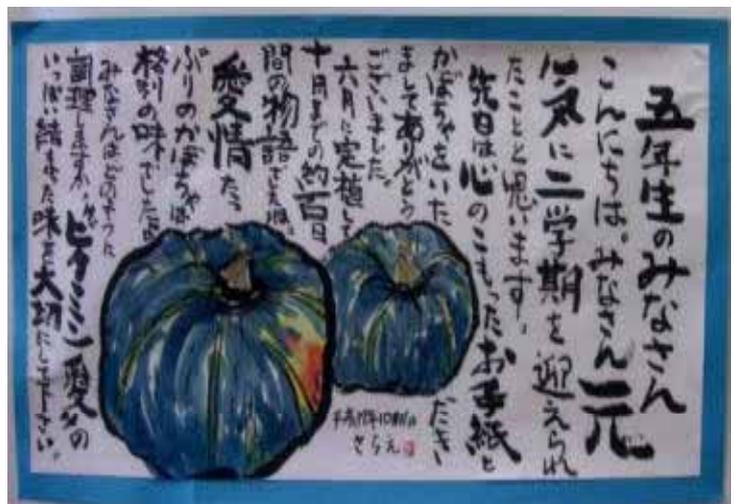
りました。

これからも、私は農業を通して培った技術や経験を生かして、子どもたちと一緒に土に親しみたいと思います。そして、農業体験を通して「食の源」として、農作物に愛着を持つ心を育てていきたいと思います。

いつの日かまた、きつとすてきな絵本にめぐり合えることを夢みながら、今日も農業に精を出しています。

方言での読みきかせ

「ダイシャクボウのボタン杉に、鷹が巣をかけたそうだ。」
「おめえ、みたけ。」
「若い衆が取りに行くつちぞー。」



さくら市 小野 幸枝

こんな方言で始まる、昭和初期の児童文学者「千葉省三」の鷹たかの巣とりの作品を、朝の読書の時間に読んでいる私です。

子どもたちが、田んぼ路を思い思いの格好で歩くさまは、私の頭の中にはカラー映像を見るようにはつきりと映ります。そしてその子どもたちの息使い、足音までが聞こえてきます。それは六十年前の私の姿とダブって見えてきてしまうのです。朝起きると、「今日は何をして遊ぼうか。」と心いつぱいに広がる楽しみを、あれこれ選び、朝食もそこそこに友だちの家に集まる、その時代の子どもの姿です。そして自然を教師に、遊びの中で危険なことを知り、毒草薬草名を覚えて大きくなりました。そんな時代の子どもたちが活躍する物語を、文字だけでなく肌で感じてもらえるように読もうと、内容は空んじるくらい読んで、今朝の読みきかせをしました。

ボタン杉に登った三ちゃんたち。腰かけている横枝の先に「たかのすらしいもの」を見つけた三ちゃん。そりそりとはつていく。手が届こうとする所で、すーっと枝から落ちてしまう。オレ等は、三ちゃんが落ちたあたりをさがしたが、居ない。

「三ちゃん。三ちゃん。」
教室中しーんとしている。子どもたちが息をつめて次の事態を予想しているのだろう。

「いない。」
すると、思わぬ離れた枯草の中に半分うずまってボンヤリとすわっている三ちゃんが。

教室の中の空気が一瞬ふわっと動いた気配がした。子どもた

ちの緊張した予想を裏切って、ボンヤリしている三ちゃん。

子どもたちは、こんな事故があったなど、すっかり忘れて楽しく家路につく。

「あっちー。」
なんともユーモア溢あふれた結末である。

私は鹿沼の方言が得意です。というより鹿沼以外の土地の言葉を知りません。ですから正しいアクセントでお話する人をつらやましく思い真似まねをしてもできないのです。根っからの土地っ子です。

毎年度、高学年の読みきかせには、必ず千葉省三の「たかのすとり」を読むことにしています。読後、子どもたちの話をきくと、

「うちでは、おじいちゃんが、たかのすとりの中のことばを使っているんだけど、おじいちゃんも、あんな遊びをしていたのかな。」

「方言を使っている人を見ると、とってもやさしい感じがするの不思議。」

「おばあちゃんに聞いたんだけど、この土地のことばを使うと、本当に心の中で気持ちが通じるんだって。」

たった十分くらいの朝の読書でも、子どもたちが、お年寄りの気持ちを理解し、強い交流を生み、郷土の方言の良さをも見直してくれていくことと感じている。

本も宝、子どもも宝

図書館は、知識の詰まった宝の島だと言われます。でも、本がどっさりあり過ぎると、何から読んだらいいのか迷ってしまうのです。それなら片っ端から読めばいいのかもしれませんが、そうそううまくいくものでもありません。やはり読みたいと思うものが、常に自分の中にあることが望ましいのでしょうか、これまたそう簡単なものではありません。

しかしその点からすると、終戦直後に子ども時代を迎えた私たちは、ある意味幸せだったのかもしれないですね。なにしろ図書館はなかったし、そしてやっと手に入った本はすべて、魅力的な宝そのものにはか思えなかったのですから。

絵本を卒業してからは、月刊のまんが雑誌を買ってもらって見るのがせいぜいでしたが、発売日が待ちきれないでいた頃がとてなつかしく思い出されます。ここでは本の数が少なかったことが幸いしていたようですね。

読み始めると、何度も何度も読み返しました。こたつで腹ばいになって。お母さんが縫いものをしているわきの、干したふかふかのふとんの上で。北風の音を障子越しに聞きながらと……。

十分に読み終わると、今度は友だちの雑誌との交換です。誰にも先を越されず、タイミングよくこの交渉が成立したときの喜びはまた格別なものでした。それから友だちの家に上がりこんで、新しい本を発見することもありました。「怪人二十面相」

シリーズやアガサ・クリステイーの「そして誰もいなくなった」などの小説が、まんがから離れるきっかけにもなりました。

これはまさに私にとつての図書館でありましたし、貴重な宝物でもあったのでしよう。

こう見ていきますと、あの頃の子どもと本との関わりは、密接な子ども社会の繋がりがあってこそそのものようです。勉強なんかはそこそこにして、子どもの仕事は遊ぶこととばかりに飛び回っていた時代です。交通事故もなく、登校、下校時の不審者に対する心配もなく、大人になるため子どもものときにやっておかなければならないこととして、無遅刻、無欠勤で遊んでいたようなものでした。だからこそ得られた宝物だったのです。

しかし時代は変わりました。子どもらしい子ども社会が望めないのだとしたら、やはり大人の手助けが必要です。私たちの時代にだって大人のお世話になったこともあるのです。それは大々的な催しをするものではありませんでした。ただがらんとした部屋に町内の子どもたちを集めて、お話をしてくれた記憶があります。絵本の読み聞かせをしてくれたのかどうか、そこは覚えていないのですが、知らない場所で、初めて見る友だちの中にあつて聞くお話は、友だちと一緒になつてとても興味深く、感動を共有できたように思えるのです。あの感覚はやはり子ども感性に満ち溢れているときでなければならぬのでしよう。そういう大切な時期に、やたらコンピュータゲームやケイタイ遊びに呆けさせってしまうのには、もったいなさ過ぎます。そのときどきの過ごし方の大切さに気付かねばならないで

しよう。子どもらしく育たなかった子どもは、そのまんま無知な大人になってしまいます。

私は、あの頃の本との関わりを思い出すとき、家族、友だち、遊び回った家並みや路地が一緒に思い出されてくるのですが、今の子どもたちにも、なつかしい思い出が残るものなのかと、余計な心配をしつつ、よき時代の体験に思いを馳せているのです。

栃木市 男性

お伽噺「桃太郎」との出会い

私は、本来読書好きで、時代小説を多く読んでいた。定年を迎え、人生を経て余生に入った頃からは、病気に見舞われたり、雑事多忙の日々を過ごしているが、今もって好んで時代小説を読んでいる。

私の義父は、文学者で片時も本を離したことはない人であった。死期を迎える直前まで枕元には本が置いてあった。

ある時、ふとしたきっかけで、その本を手にしたとき「桃太郎」という大きな文字の題名が目飛び込んできた。それは芥川龍之介の本であった。早速その本を手にして一気に読み切ってしまった。なんとその「桃太郎」は悪い鬼を正義の桃太郎が

成敗するという大前提をくつがえしたものであった。

その時の感動は今もって忘れることができない。中国の「三国志」以上の気宇壮大な構想をもって書かれているのと同時に、文章も生き生きと魂を持った生物のように、躍動しているように感じとられた。

義父は、どのような気持ちで最後までこの本にこだわっていたのだろうか。今もって疑問である。

興味を持った私は、その後「桃太郎」に関する資料や本をあさり始めた。その興味は益々増すばかりで、お伽噺「桃太郎」にすっかりのめり込んでしまった。

よしっ！お伽噺「桃太郎」にかかわった知識や体験、これは自分自身の楽しみとしてしまい込んでしまうには、あまりにも、もったいない。この感動を少しでも多くの人々に知ってもらいたい。世のため、人のために役立つのならば、少しでも役立ちたい。その後、機会ある毎に、この話をして、ついに最初の出会いとして、老人介護施設の「敬老の日」のお祝い慰安のイベントに「桃太郎」の話を持ち込むことができた。幸いにも、手助けしてくれる施設の若い男性が、四コマ漫画風に「桃太郎」を書いて応援してくれた。

単調な老後の生活を送っている施設の老人たちは、角度を変え、見方を変えて解説した「桃太郎」の新しい出会いに感じ入ったのだろうか。子どもの頃を思い出したのだろうか。目は生き生きと輝き、明るい雰囲気醸し出してくれた。その日は天にも昇る思いでうれしく、有頂天となってしまうた。

これを機会に私は、お伽噺「桃太郎」を人々に伝えていかねばならないという希望をさらに強く持ち、余生も明るくなくなってくるのをおぼえた。

その後は、機会ある度に、子どもたちを相手に、小学校・公民館・児童館・私塾の誕生会やクリスマスパーティー等のイベント等で話をしていく。

たった一冊の短編小説「桃太郎」を通じて子どもたちとの対話は、単にお伽噺を後世に伝えるだけでなく、その場は学習の場としても提供されているのである。

例えば、

「桃太郎」の話は、いつ頃の話か。

「桃太郎」の話は、なぜ全国で伝承されているのか。

「桃太郎」は、どんな大きな爺さん・婆さんは、

どうして年をとらないのだろうか。

「桃太郎」は、なぜ犬・猿・雉子を連れていったのか。なぜ

力持ちの牛や、足の速い馬を連れていかなかったのか。

「桃太郎」の桃の実の中に、子犬がいたらどうなるのか。そ

の答は「花咲爺さん」の物語の出だしとなる。

このように勉強する教材としても生かされてくる。その結果、子どもたちは、完全に「桃太郎」の世界に引きずり込まれてくる。そして真剣な面持ちで目は生き生きと輝いてくる。そこで出てくる子どもたちとの応答。これがまた、実によい。「桃太郎」を通じて子どもたちと気持ちがあふれ合い、夢の世界、現実の世界と様々に織りなす七色の糸模様は、皆酔いしれてくる。

話を終わって別れるときの子どもの背中を見てみると、大きく、伸びやかに、明るくなり、未来に向かって力強く進んでいくように見えてくる。

単なる本の読み聞かせだけでなく、最近では、自作自演のアドリブの「桃太郎」を演じ、自己満足をしている。

下野市 菱澤 清

児童生徒に演ずることを提唱

今日、子どもたちが口をきかなくとも用の足りるような時代になりましたが、便利になったようでも、何とも言語生活の貧弱になった状況が蔓延しております。もっと楽しい思いでお互いの思いを伝え聴くための、日常の教育的試みが行われてしかるべきと考えています。

豊かな音声言語生活のためには、自分たちで演じてみるのが大切です。初めて経験する子は戸惑ったり尻ごみしますが、何か一つ短い表現でも、失敗しながらでもやってみると、少しずつ自信がついてくるものです。

私は、若い頃、外国人教師に、「君たちは俳優になりたいと思っただけか？」と聞かれたことがあります。私たち生徒の多くは「めっそうもない」という顔付きで「ノー」と答

えると、その教師は言いました。

「人間というものは、誰もが望むと望まざるを問わず、一生を通じて、一瞬一瞬を、自分を演じながら生きる、つまり俳優なのだよ。」

みんなして、「なるほど」とうなずかされたことでした。

せっかく長い一生を生きるのなら、やはり自分自身を最高に演じ切るような生き方をしたいものです。恥ずかしいなどと遠慮していたのであれば「損」というわけですね。

もう一昔も前のこと、東京からの帰りの電車の中で、大宮駅から養護学校の中学生の女生徒が二人乗り込みできました。彼女たちは、巧みな手話に夢中で、電車が栗橋の駅に着くまでずっと対話をしていました。その身振りがとても楽しそうでした。でも、一人が栗橋で降りるとき、電車の中の一人はとても悲しそうなお表情で、ドアのガラスに額をびったりと寄せて、プラットフォームに降りた友たちと別れを惜しんでいました。多分、明日のこの時間まで彼女たちは、こんなに生き生きと対話を楽しむ時がお預けになってしまうのだなあと、とてもいじらしく思えました。



下野市 菊地 喜平

読み聞かせを体験して

町の図書館の指導で、「学校図書館ボランティア」が立ち上げられ、私も入会したのは数年前のことである。小学校をまわって図書の修理・整理をするのが主な仕事で、将来は読み聞かせも、ということだった。

事前に、ほぼ一年間の準備期間があり、それぞれの講師について研修会がもたれた。修理や整理については問題なかったが、経験のない読み聞かせにはほとんどの人が尻ごみをした。しかし、会の誕生から一年後には、町内の一つの小学校で朝の読み聞かせが実現し、六名の読み手がデビューを果たしたのである。高齢で、距離的にも無理のある私は遠慮した。しかし、読み聞かせに取り組む会員たちのいきいきとした姿を見るにつけ、私の気持ちの奥で何かうずくものがあつた。

ある日、地元の小学校の茶摘みの手伝いにいったとき、私は思いきって校長先生に「読み聞かせをさせていただきませんか。」と、お願いしてみた。幸い喜んでいただき、他に一人協力者があつて、その小学校が閉校になるまでの三年間、私はまさに水を得た魚の如く、いそいそと朝の十五分間の読み聞かせに取りくんだ。全校児童が六十名に満たない学校なので、全員を二つのグループに分けて、私は高学年の方を担当した。

今から四十年ほど前、私はこの小学校の教師として勤めたことがあつた。ほとんど一年生の担任だったから、子どもたちによく絵本を読んでやったものである。当時の絵本が今も手元に

あるが、そのころの印象はほとんど残っていない。今思えば、体育の時間、雨が降ったから本でも読んでやろうかというような、時間つぶしの安易なものだったのかもしれない。

私たちボランティアの会員は、身近なところで朗読の指導をしてくれる先生にめぐりあい、私も七十歳過ぎての手習いを始めた。この出会いがなかったら、読み聞かせという活動がこれほど楽しく、また価値あるものとは、思わなかったかもしれない。

これによって、私の民話や童話の読み方ががらりと変わった。子どもたちにより良く伝えたいと思うあまり、声を出して何度も読むうちに、次第に内容の理解が深まっていくのである。かつて難しい本ではない。しかし、なぜか回を重ねるうちに、登場人物の心の奥まで見えてくるような気がしてワクワクする。たかが絵本などと少々軽く見ていた子ども向けの本が、今、新たな命をもって私をとらえるのだった。

昭和の初めに生まれた私は、新しい作品にはなかなかなじめない。大正から昭和にかけての童話、海外の読みふるされた作品などになってしまふから、今の子どもたちがどれだけ受け入れてくれるかという不安もあったが、やはり私は自分の感動を伝えたいと思った。

日本の民話の外に、芥川龍之介、宮沢賢治、新美南吉などの童話のいくつかは、予想外に喜ばれた。また、ビクトル・ユーゴーの「ああ無情」が大きな感動を呼んだことにも驚いた。これは、毎月二回ずつ、五か月ほど継続して読んだものだが、子

どもたちの声によれば、次回が待ち遠しかったそうである。

多分、今の小学生たちは、右のような作品を自ら選んで読んだことはなかったろうし、もし、読んだとしてもどこまで理解できたかという点には疑問も残る。

読み手に、この感動をなんとかして伝えたいという願いと努力があればこそ、子どもたちの理解も深まるのではないかと、私は自らの体験を通して感じた。

子どもたちのきらきらと輝いていた瞳こゝろを私は忘れることができない。

大田原市 女性

読書は心の栄養

「百冊読破」と思わずバンザイをしてしまいました。

昭和三十六年の頃、ある大手の会社のコンピュータの入力の仕事をしていました。その時、五十分間入力すると十分の休み時間がありました。その十分間をつなぎあわせて読んだのが百冊でした。

結婚して子どもができて読み聞かせをすることにより、二人とも本が好きになりました。時々児童書を買って子どもに与えているうちに、二百冊近く絵本がたまっていました。

今では孫がそれを読んでいます。こんな投資も周囲では無駄だといっていましたが、私は決して無駄には思えません。何世代にも利用されることになるであろうと思うからです。

たしかに本を読むことにより心が豊かになります。周囲の人たちにも勧めています。幸いなことに近所に図書館もできました。ほとんどたいくつしないで済みます。これも若いころに読書の楽しさを知ったからだだと自負しています。

最近、本を読まない人が増加していると聞いています。心に栄養をつけるのは読書が一番だと思います。

鹿沼市 岡本 チヨ子

声のボランティア

「あら！こんにちはー。」

「どちらへ行かれるんですか？」

踏み切り近くのお宅から出てきて、その曲がり角でバッタリお会いした方は、私が十数年前に朗読ボランティアをしていた時の利用者のお一人でした。

「嶋村さんでしょうか？」

「はい！そうですよ。よくわかりましたね。お元気ですか…。」
目が見えない筈なのに、どうしてわかったのかと不思議に思

っていましたら、いつの間にか彼女の丸味のあるふっくらとした手で、私の指をまさぐっているのです。

「だって、最初の声でわかりましたよ…ウフ。」

あの頃からも十数年も経っているのに、すっかり忘れられてしまったかと思い、軽い会釈をして通り過ぎようとしたところでした。

昭和五十九年三月、職を退き家庭人となった私は、自分のできるボランティアはないものかと考えておりましたところ、町の社会福祉協議会主催の朗読ボランティア養成講座が開かれることを知り、数週間の講座を受けて、視力障害者の方々と接する機会を得たのでした。

視力障害者の方へ町の広報や、図書館の蔵書などを朗読して録音し、更に、録音したものを多くの利用者の方々にうまく利用できるように、数本のテープにダビングし、自宅へお届けするのです。そして、帰りには前回のテープを回収してまとめて置き、いつでも再度の利用に応えられるようにするシステムで、会員が数名ずつの班に分かれて、毎週金曜日に集まっては企画から本作り、宅配と続けておりました。

この一冊の本を作りあげることがはそれこそ大変な労力を伴う仕事でしたが、それを待っていてくれる人がいるということが、大きな励みとなりました。また利用者の方々が視力を失ったことによる多くの困難を克服して、力強くそして明るく生き抜いている生活ぶりを直接目にして、健常者である私は逆に勇気づ

けられていることに対して、感謝せずにはいられない心境でした。

不馴れの頃は、訪問して玄関に入るのにも何かと躊躇するものがありました。お会いする回数が多くなるにしたがい、視力を失った方とは思えない程の明るい元氣な声と笑顔で迎えて下さり、肩や手に触れながら話していると、次第に心の中に充足感が満ちてくるのでした。

でも、障害者の方への思いやりが不足していたことを反省させられたこともありました。本を読み録音する時は、できるだけ雑音が入らないように部屋を閉め切ってやったり、発音、イントネーションに気を付けて録音したつもりでしたが、耳から入った本の世界に集中して自分のイメージを描いていく障害者の方々にとっての雑音は、耳ざわりなことであり致命傷となることを理解していなかったのです。以後、家庭で録音する時は、真夏でも外部の音を遮断するために部屋を密閉し、冷房器機から発する音を切るなど、神経をとがらせましたが、録音の途中で訪問者の押すインターホンなどの音が入ってしまうこともありました。そんな時は、その場でストップし逆戻しして再度録音をやり直す始末。ダビングの段階でも二台の録音機を据え三台を並べて一度に三本のテープを作るのでした。

丁度、読書会の集まりで図書館に行くところでしたので、本についての話など冗談を交えた会話もいたしましたが、久しぶりにお会いした筈なのに、月日の流れを感じさせない程身近な

ものでした。現在は、事情で退会して居りますが、折を見て復帰したいと考えています。

那須塩原市 女性

「ラジオ深夜便」を手にして

数年前の話です。NHKの深夜番組、午前四時からの「この時代の」という放送を、夢つつのまま耳にしました。

陸の孤島といわれる村の話です。道路の整備や村人の交流を図るために、いくつもあつた分校を統合し立派な中学校を建てたところ、贅沢だという理由で補助金をカットされてしまった、というような話に真剣に聞きいってしまいました。その後、文部省の方が視察に見えて、かくあるべきと絶賛されたとか。後に日本建築学会賞を受け雑誌のグラビアに出たそうです。

その後、「ラジオ深夜便」が発行されていることを知り、平成十七年の年末から入手できました。すると、翌年の二月号に以前ラジオで聞いた話が、「田野畑村に梅が咲く頃」といった題名で載っているではありませんか。まるで旧知の友に出会ったような思いで一氣に読みました。

岩手県北部の田野畑村の村長・早野仙平氏が、漁業組合長を十年、村長を三十二年間歩まれてこられた記録なのでした。

物心両面孤立状態の村に、道路こそ村の命であると、用地の取得から着手、最短のコースで開通へと漕ぎつけたところ、どうして田野畑村だけ工事が進んだのかと不思議に思われましたが、知恵を絞った結果の成功といえましょう。

「次の世代には胸を張って『田野畑村出身です』と自信をもつて言わせたい。」これは、村政の大きな柱として教育を揚げた村長の、意気込みと将来への大きな希望、夢の言葉です。

また、乳児の死亡率日本一のこの村の医療体制を確立するため、千葉県から臨床・一般診療共に経験豊富で有能な先生を迎えられました。村長との挨拶が済むと、先生は「村長、私はこの村で何をすればいいのですか。」と聞かれたそうです。私は「何故こんなことをと、一寸考えてしまいました。医者が？」と。村長は「患者を治すより、村民が病気になるための教育をお願いします。診療所は赤字になっても経営面には気を遣わないで下さい。」と。この会話を読んでお一方の立派な人格が伺われる思いがしました。

次は更に心うたれたことです。この先生の奥様は転地療養を要するお方でしたが、四年程村で生活なされました。野の花等を通して村の人々と共に心温まる交流をされてこられました。が、千葉に帰られ暫くして亡くなれました。この報を出張先で受けられた村長が、喪服と弔辞の用意を指示し、翌日斎場にかけてつきたところ、見ると会葬者の大半が村の人たちでした。遠隔の地岩手から夜通しバスを走らせ、千葉の斎場に着いた様子でした。村長は「奥さんからいただいた庭の小梅の蕾がよ

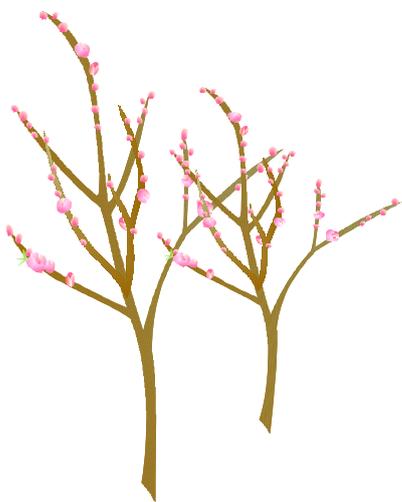
うやく出てきました。」と弔辞に読まれたそうです。現在村には「花笑み基金」が設けられています。「妻の好きだった梅の花で村いっぱいにして下さい。」と寄付されたもので、今では二百本以上の梅が植樹されているそうです。

後日、村に關係の深い作家、吉村昭氏にこの話を話されたところ、早速「梅の蕾」という題名でこのことを書かれ、好評で読者が貰い泣きをしたと電話があったとのことでした。

まだまだ多くの話題はありますが、村長さんをはじめ先生のご家族、村の方々の誠実さ、優しさ、何と表現することが良いのか、純粋な皆様の気持ちに心打たれ、忘れられない思い出の一つとなっています。

先生は、その後二十年近く村に残られたとお話です。

足利市 女性



今回「子どもたちに伝えたい読書の体験談」を、社会を支えてくださった概ね六十歳以上の県民の皆様にご募ったところ、たくさんの方々からご応募いただきました。

体験談の一つ一つには、本との出会いがその後の人生に大きな影響をもたらした様子や、本を通じた人とのふれあいのすばらしさが、紙面いっばいに表現されていました。どの体験談にも、本との出会いには必ず人とのかわりがあること、読書を通して人との豊かなふれあいがあることがえがかれています。それぞれの家庭や地域で、温かなふれあいがあることを嬉しく思いました。

少しでも多くのメッセージを子どもたちに伝えたい、そう思いながら編集作業に取り組みました。子どもたちが、メッセージを直接受け取れるように、それぞれの章の前半に子ども向けの作品を掲載してあります。作品を選んで子どもに読ませると

きなどにお役立てください。

また、この冊子をこのまま子どもたちに読み聞かせたり、ご自分の体験や思いを添えて話して聞かせたりするなどして、ご利用いただければ幸いです。

おじいちゃん、おばあちゃんからのすばらしいメッセージが、次の世代の子どもたちに伝わり、子どもたちが豊かな人生を歩んでいくことを願ってやみません。

この冊子が、様々な活用され、「本を通じた心のふれあい」が一層広がることを祈念しています。

本との出会い

人とのふれあい

— 子どもたちに伝えたい読書の体験談 —

おじいちゃん、おばあちゃんからのメッセージ

平成十九年一月

発行 栃木県総合教育センター

編集 栃木県総合教育センター 研究調査部

〒三三二ー 〇〇〇二 宇都宮市瓦谷町一〇七〇

電話 〇二八（六六五）七二〇四

F A X 〇二八（六六五）七三〇三



いきいき栃木っ子3あい運動
- 学びあい 喜びあい はげましあおう -